

堺鑑さかいかがみ

衣笠一閑宗葛きぬがさいつかんそつかつ 著

久次米晃 翻刻

(古板地誌研究会発行『堺鑑』を底本とする。)

## 堺鑑

### 堺鑑序

### 神廟

神明宮 三村宮 天神宮 今池辨財天 方違大明神 戎宮 附・嶋 芝居 水茶屋

### 官室

甲明神 附・馬堂 宿院 稻荷 荒神堂 乳守宮

### 陵墓

仁徳天皇陵 田出井山 武内宿祢墓 當津在家四所の三昧

### 古跡

九艘小路 附・九本松 鉾塚 飯匙堀 住吉御田植勤所 七堂 附・繼嶋 躍念仏 高野堂 勢至塚 朴津郷  
玉横野 戸立野 目口町 占辻 釣狐寺 塩風呂 市戎并大黒町 向井領井 海会寺井 龔井 高須  
首截地藏

### 古事并戰場

細川清氏 細川氏春 赤松弾正氏範 大内義弘 三好海雲 三好宗三 将軍源義尹 三好實休  
松永弾正久秀 信長公 東照大権現 秀吉公古今數奇沙汰の事 納屋助左衛門呂宋より帰朝  
完殮屋 九鬼右馬允嘉隆

### 寺観

大経寺旭蓮社甘露山 向泉寺三国山 悲田院法護山 極楽寺清浄山 金光寺 南宗寺龍興山 禅通寺  
大安寺布金山 海会寺宿松山 引接寺勅定山 経王寺 顕本寺 光明院 櫛笥寺 本教寺 妙国寺  
北御坊西本願寺信證院 南御坊東本願寺羅漢院 鹽穴寺 専修寺 少林寺 妙慶寺栄照山 了覚寺光明山  
祥雲寺龍谷山 長谷寺 東光寺 西光寺 善長寺 本成寺遥宝山

### 仕官

三好存保 松井友閑法印 松山新助 小西如清

### 僧道

瑞溪 一休 岐翁

## 隱逸

沅南江 一路居士 牡丹花 當津連歌門弟者

## 伎藝

意雲 紹鷗 道陳 附・空海 千宗易 連歌師宗椿 宮尾道三 高三隆達 鼠楼栗新左衛門 車屋道説  
喜多七太夫長能 惠藤源左衛門 堺舜慶 一節道清 甫竹 土佐久翌 表具師西順 雜賀淨甫 加賀四郎  
碁利玄 中将碁温故 松井与次郎 名物・古來當津所持名物茶道の事

## 土産

一休和尚鳥繪扇子 湊壺鹽 湊紙 鐵炮 土居原鋸 出齒庖丁 附・御方庖丁 甲鉢鍛冶 白粉 天神前櫛  
塗木履 附・雪踏 白炭 舳松瓜 鬼煎餅 紅葉豆腐 前魚 撰糸絹 金紗

## 堺鑑序

孔夫子の曰く、里は仁あるを美しと為。誠なる哉。斯言扶桑六十餘州最も其著しき者、攝泉河の堺也。地畿内に属し、居海涯に接はる。風俗淳朴、人物質素にして、仁厚を以て交はる。是故に境偏小たりと雖も、名甚だ廣大也。神廟輪奐の美を餘し、人家鱗差の觀を聯ぬ。萬物悉く備はらずと云こと無し。獨り古風を存する者、堺を除きて豈に他に求むること有らん。

予、其地に生れて其郷に長ぜり。是を以て時時其由来を考へ、以て忘れざることを示す。只恨むらくは、性魯鈍にして胸に樗里が智囊無く、腹に邊韶が經笥無し。癡癡獸獸として直ちに寸志を旌はす。想ふに、其一州の事迹繁多にして偏く探るに堪へず。茲に一邑の有る所を擧げて、其梗概を記す。夫れ扶桑は神國也。是故祠廟宮室陵墓を以て始めと為し、古跡寺觀中と為し、人物名物土産を終りと為す。括りて三卷と為し、號して堺鑑と曰ふ。案ずるに、堺は境也。疆、疆相與に意を同じふす。唐帝曰く、我に三の鑑有り。銅を以て鑑と為して妍蚩を視るべく、古を以て鑑と為して興替を識るべし。人を以て鑑と為し徳失を明らむべし。魏徵死して一鑑亡ぶ。今日拾得て、以て吾が堺鑑と為す。看る者、予が譎陋を笑ふこと無くんば幸甚。

天和三稔龍癸亥に輯る 夏五月の望 衣笠氏一閑宗葛序す

## 神廟

### 神明宮

此社は天照皇大神宮四社の中、神明は中、八幡は西、春日は東、其次の宮は伊勢外宮内宮を一所に勧請し奉る。何の時に勧請すと云事分明ならず。

此社内、表類九間、裏行十間也。

毎年九月十一月各十六日に、神主祭禮を勤。

此神前に町造故、神明町と云傳り。

毎年六月、祓の為に住吉の神輿堺に御幸在と云共、神明を恐奉、遙に道を隔て神輿を供奉仕申也。

世俗に此社を住吉の婦人と云て、御祓の神輿を去しと云傳るは、誤也。

且又、本社棟札に文禄と云年號あり。再興と見たり。

### 三村宮

南 莊泉州大鳥郡鹽穴下條開口村密乘山念佛寺大寺と號す。

鎮守三村大明神は舊事本紀云、かけまくも忝も天神七代伊弉諾尊の御子として、日向國小戸の鹽瀬にて御誕生在て、其後葦原瑞森に移住玉ふ事、無量歳也。御神號を事勝負勝國長狹尊と申奉。鹽梅

の事を司どり玉ふに依て、鹽津老翁とも名付奉る。

然に、人王十五代神功皇后三韓退治の時は、當社明神、即住吉明神と顯玉ひ、皇后に力を添玉ひて大敵を討平、日本を安全に守玉ふ事、偏に當社三村大明神の御神力也。即三韓御出陣の時、方違あそばしける地、今田出井三國山の良に御社あり。扱、御歸陣の砌、御船九艘、此塚浦に著し所を九艘小路と云。又、船を継玉ふ所を舳松町とて今にあり。明神の神馬御甲御銚など、此地に於て神に祝奉る。

次に、三村明神と崇申す事、明神、當津に御影向の時、今の川尻と申す所にて御食を進奉る。初めて口を開在けるに依て、此塚南莊を開口村と云。其時捧奉るは、開口團子と云。今の御祓團子の事也。又、塚の木戸村原村とてあり。是に開口村を添て三村として氏神と崇敬し奉るに依て、三村大明神と申奉。木戸、原、両村の跡は、今大小路の西南の田地となれり。即、住吉の外宮として、明暦元年己未、住吉と一所に御造替ありし事、世の知處也。

此開口村を塚と申始は、白鳳二年と云傳たり。扱又、念佛寺と申は、人王四十五代聖武皇帝、行基菩薩に勅定在て、天平十六年甲申、佛地に開基あそばしける。茲因、開山は行基大菩薩宗の祖師は弘法大師也。當天和三年に至て九百四十年也。又、大寺と云事は、本號は大念佛寺と申しを、世俗大寺と呼来り。

此寺、往古は知行も多、代天帝王勅願所として綸旨あり、院宣あり。其外は尊氏將軍の末、代代御教書あり。管領衆の書状もあり。然共も、太閤秀吉公御朱印より、大寺の知行高八十石に減じ、御當家御代、御朱印にも八十石とあそばし候に依て、猶以大寺は真言宗にて無本寺の所也。

【大寺諸伽藍本社末社由来目録】

金堂一宇 五間四面 中尊薬師 左 釋迦 右 彌陀日光菩薩十二神將 明暦元年乙未、御造替也。  
三重塔一基 二間半 本尊 大日 聖徳太子作 四天王 寛文三年癸卯、氏子建立再興也。  
高樓一基 鐘 時の刺吏長谷川左兵衛守尚、再興也。  
食堂一宇

本社 三村大明神  
相殿 南祇園牛頭天王、北生玉大明神。  
末社

伊勢 外宮 内宮  
安住寺鎮守 天神一社。此社、大寺の内、安住寺と云寺あり。本寺觀音堂は一亂に炎上する。故、今退轉す。

荒神一社 大寺地主神也。神木楠あり。  
馬堂明神一社 大寺北門前、南大小路町の内にあり。  
甲明神一社 稻荷一社 舟玉明神一社 戎宮一社 大黒天神一社

影向石 三村大明神御影向の時、此石に御腰をかけさせ玉ふ也。瑞森薬師堂の前にあり。  
鉾塚 境の巽角、不盡庵と云寺の前にあり。  
如意御前一社 大寺より三町離、艮角、向井領町の内にあり。大寺の末社也。寶嚴庵と云寺也。

瑞 森藥師堂一字

本尊は行基菩薩の作也。萬治二年己亥、開帳あり。此森結果の地、大寺の秘所也。世俗云傳は、塚浦の三浦坊と云天狗の住所とかや。道春神社考、僧正谷の條下の評に云く、柿本紀僧正は、高雄の峯に入て大慢心を起し、太郎坊と為る。或は曰く、和泉塚の側に紀僧正と名を同する者有り。我慢心をして死して魅と為る。之を考ふるに、三浦坊か、未だ詳かならず。

西門 額密乗山 竹内門主良 尚親王、御真筆也。

石鳥居 額三村大明神 御同筆。

衆徒六坊并西座二坊

當寺内間詰 東西南北六十一間四方也。

### 天神宮

北 莊攝州朴津郷、常樂寺の鎮守。

聖廟の御神容は、菅丞相筑前の大宰府の謫所に御座時、自御影を彫刻し玉ふ七天神の其一の御影也。

延喜年中に當濱よりあがらせ玉ふ。即民家の側に靈祠を營構して、庶民參詣す。

一條院 御宇長徳二年丙申正月十八日、寅の一點に奇瑞有て、彼寶殿の御戸開、御神體飛行し玉ひて、

當社紅梅の樹頭に安座し玉ふ。貴賤群集して未曾有の思をなす。

余 以来當寺に御神體鎮守せしめ、昔日不意の災に罹て烏有とならせ玉ひしを、其後世人の手に渡

せ玉ひしを求、假殿に舍玉より以来、北莊氏子として明暦三年に造替有し事、世の知處也。

殊は太閤秀吉公より以来、御當家に至て御朱印社領として二百二十石納所す。

寺内間詰 東西六十三間半 南北六十一間半。

【諸伽藍本社末社来由目錄】

金堂一字 七間四面 中尊 彌陀 左 大日 右 釋迦

護摩堂一字 三間十二間 ○不動觀音藥師元三大師

高樓一基 二間四面

連歌所一字 四間半二間 ○毎月是於連歌張行す。

食堂一字

本社 天満天神 相殿 春日十一面觀音 表二間、入七尺五寸。

拝殿一字 二間七間 ○片間に於て神樂奏す。

末社

伊勢一社 外宮 内宮

大梵天王一社 天神地主也。

荒神一社 寶頭廬一社 加賀大明神一社 戎宮一社 大黒天神社一社 春日一社 熊野権現一社

祇園一社 辨財天一社 舟玉一社 稻荷一社 八幡一社 愛宕一社

二王門 表二王、裏隨身。 ○表三間半、入二間。 ○榎並正氏圓通建立。  
衆徒 昔六坊 并西座 六坊  
宗の祖師傳教大師、叡山末寺、天台宗也。

## 今池弁財天

禪通寺と云寺より支配す。

尊體は、大和國志貴の麓、教興寺の辨財天と同伴、聖徳太子彫刻也。

昔日、不意の災に罹て烏有とならせ玉ひしに、此池の水底より御手を拾 出奉、寛永年中に再興

して、今京佛師の新作也。即今池と云所の北側に假の宮構あり。

往古より毎年正月七日に、禪通寺より御本體を供奉し奉て、寺僧祭禮の儀式を調。諸人、參詣群衆

す。其晩に及で御本體を禪通寺へ還入し奉る。

古昔は、此所禪通寺の領内たりし時、此今池の水を近邊の田地へ水分せし故、田夫其時より崇敬せ

し由来を以て、延寶八年庚申正月に新 殿を造 奉とかや。

## 方違大明神

本地、十一面觀自在菩薩也。

往昔、神功皇后、新羅を攻玉ふ時、諸人、天神地祇を請じ玉ふに、日本國中三千七百五十餘座の大小

の神祇冥道勅請に順出現し玉ふ。就中、住吉大明神は副將軍とならせ玉ひ、三韓を容易に征伐

し玉へり。是より異國吾朝に隨事、誠に以て神力の冥助也。

其後、皇后攝州住吉に至玉ふ時、爰はますみよしの國也と、住吉明神の神託有しかば、皇后即西海

に向せ玉ひて後祓をし玉ふ時、かけまくも 忝 住吉明神海中より出現し玉ひ、神船九艘にて泉州

堺地守の浦にあがらせ玉ひ、御銚を立て、其より先悪神魔障を拂 清、住吉に永御鎮座有べしとて、

此勝地に於て方違の 政をなし玉ひ、此地より住吉に御鎮座有し事也。

末代に至まで悪方の祟有事を人に知しめ、魔障を除しめんが為に、此地に跡を垂 方違大明神と現

じ玉ふ也。茲 因、家を作者は、此宮地の土を受、其普請する所の地に埋、或 旅立する時は其首途

の席に置。又は船中長途を経者は、此土を持て行也。是は、向より向へ行時、方違の守とするなり。此札土

を受、信心をなす者は、方違の崇災難有事なし。

毎年五月晦日は、方違宮の祭禮也。茲に因て、此日土粽をして、諸人群衆をなし是を受事也。常の

日は別當向泉寺にて申 受也。住吉御造營の時、此宮も天下御建立の所也。

## 戎宮 附・嶋 芝居 水茶屋

此當境の濱と申は、王城近所なれば町静にして、世を渡浦の船人までも平砂の磯に 盃を浮め

贍しより以来、災殃の難なくして、其徳を以て一の嶋頭。

濫觴は、寛文四年戊申八月八日に小嶋頭、十一月十三日海中より龜上。三日経て死けるを、十

五日に葬。龜の長四尺二寸、幅四尺、箱板の厚一尺五寸。此龜を入る埋所は橋向にして、別當堯識觀月院頼辦法印加持して辨財天と崇奉る。

且又、石戎の上せ玉ふ事は、戎町濱の某、此浦の海中に石戎の在所を先祖より見聞に及に依て嶋の頭と。又、龜の上に就て某と浦中の人民を語、在所を尋上奉んと願しより、戌の十二月朔日子の刻に、海中の石戎に尋當て其在所に幟を指、注連飾して歸しに、其夜大風して荒玉ふ。三日過て浦中の人夫百餘人して舉奉拜するに、御影石の苔蒸、貝殻取付てあり。石の形は戎の體形在き。御長三尺五寸、幅三尺、厚一尺七寸也。

境を得、時に逢て龜宮と同所に假の宮造にて日數十五日開帳して、諸人拜をなす。同月十七日に閉帳して、其より造宮執行、龜宮も同時に造宮有て、別當堯識遷宮し奉る。

然處に、延寶六年戊午の中比まで此所に宮立在けるを、翌年己未十二月十三日、宮地北の磯側に替て宮移、十八日戌の下刻にして、今宮立在也。其夜も前の如荒玉ふ。又、戎の上らせ玉ふ。海中の跡は、今築地と成り、其上に町屋を建り。

### 同所芝居

延寶五年丁巳十二月末に芝居建て、戊午の正月に初芝居有て群集せしに、庚申十月廿三日の上刻に、舞臺の後より火出焼失す。誠に世俗の詞に、午は火にて果と云に合るにや。其後、又興行す。

### 同水茶屋并觀音堂

延寶八年庚申の中秋の比、刺吏水野氏の御時に、茶屋五軒御免を請、誠に水の流を恋茶屋、行末富さかいの浦の鹽茶をたてて、世を渡舟人も泊の津となれり。

戎の後に觀音堂あり。寛文十二年壬子十一月八日に、堂建立す。此觀音は聖徳太子の御作。長「二尺五寸」の立像也。本は但馬國窟より守來て、堯識法印、此所の別當たる故に一宇建立して安置す。

## 宮室

### 甲明神 附・馬堂

神功皇后、住吉明神を副將軍として三韓退治有て御歸陣の時、明神當津海濱へ上せ玉ふ砌、甲を神に祝奉る。御社は雛横小路町に在。

又、住吉の神馬を繫玉ふ所を神に祝、馬堂明神と世俗云習せり。古昔は大寺北の門前に宮造在

ける。今、宿院の山の西鳥居の南北に中興勸請す。北は馬堂、南は甲社と云習せり。又、或人の云く、馬堂薬師と云るは、誠に靈驗新に御坐故に諸民參詣す。或時、南北の馬借、此堂に集り、後後は寄合所と成故に馬堂薬師と名付たり。所は今の雛横小路町の中に在。

### 宿院しゆくけん

此地は、住吉明神毎年晦日の御祓御旅所也。山の上に二社有。

北は楫取明神寶御前と云り。此所へ近年勸請す。此所の良に寶藏有。山の下に瑞垣を廻て空地有。此中へ御祓の時に、御輿入玉ふ。住吉御造營の時、此所の諸式も同く公儀の御造立也。

南に堀有。是を飯匙堀と、世俗に云来る。住吉明神の干珠を埋せ玉ふ所とかや。

此地、東西南北の通路の口十一口有。住吉の吉と云文字に准たり。世に云傳れ共、正説を知らず。又、宿居とも書事有。神の假に在故にとかや。大鳥居の両脇の宮の事、巻の端に記。

### 稲荷いなり

此社は、櫻町鍛冶。芝辻氏道逸、元和年中に勸請申所也。

此地は、台徳院殿より拝領す。時の刺史は喜多見若狹守勝忠也。茲因、芝辻の代代、此宮地に領たり。

### 荒神堂くわがわじんどう

古昔、攝州清澄寺より勸請申、石體の荒神也。

御長三尺、幅二尺、厚八寸有。此石に文字彫付有しとかや。

一亂後に、今の辨財天の社の前の池中より堀出し宮内に納。即三村大明神の末社也。然と云共、池長三宅兩氏より三村寺僧へ訴、南莊大工中間へ恩借す。

文明十六年甲辰十二月廿九日、別所に移奉る。南莊榭屋町に勸請申し、大工中の寄合所とす。今に至て、毎年十一月の火焼祭、右の故有を以て三村宮寺僧參勤す。

### 乳守宮ちもりのみや

何の御時にか有けん、此森の地主神を祝、津守明神と崇奉り、御社を構たりしに、古昔或人の娘、乳の垂ざるを歎、津守と云を乳もりと聞て、此神に詣祈誓を罹しに、靈驗新にして心の儘に乳味垂事を得たり。其を様として祈に、験有ずと云事なし。茲に因て、乳女郎と世俗云習せり。俗説にして正説に有ざるべし。誠に神は人の敬に依て威を増とかや。

# 陵墓

## 仁徳天皇陵

此陵は、泉河攝の堺、大小路の東の町外より八町許離たり。世人大仙陵と云り。天皇己亥の歳に崩す。宮廟は難波の邊高津に、平野明神と號す。誠や諸國より来て此陵を築しに、尾州より人歩遅來故、其築残は其儘谷となれり。今に尾張谷と云り。是俗説、未實否を考ず。

山の間敷の事、摠山の根廻七百二間、山の南の高十四間、北の高十六間四尺、中の高十間五尺。中嶋摠じて此陵より方角を取、余の陵所記す。

秀吉公、度度此陵にて獵し玉ふに、假に居を構玉ひければ、其墟を今に茶屋山と、所の人云り。此近郷萬代村と云所に履中反正両天皇の陵あり。

## 田出井山

此陵、菟道太子の陵也。然を誰人か云習して田出井山と云來ぞや。未本拠を見ず。又、三國山と名付也。

摠山の根二百三十間、東山の根南北七十二間、西山の根七十間也。

按、大鷦鷯尊と菟道稚郎子命と互に位を讓玉ふに、菟道太子は弟たるに依て自思召は、我生て天下を煩さんよりはとて、山城國菟道里を忍出玉ひ、此地に於て自死玉ふとかや。即此地に葬奉と申傳侍。古書に、自死玉ふと云を、自穀味を断て飢死玉ふとも了簡せるとかや。又、説に、此陵を推古天皇の陵とも云り。両説にして慥ず。

## 武内宿祢墓

大仙陵より坤に當り、三國山よりは午未の方也。武内は應神天皇の臣也。世人、長塚山と云り。

## 當津在家四所の三昧

摠じて塚の中に四所の三昧あり。湊村、向井領、皇子飢、七度濱也。是皆行基菩薩の開基と云傳也。

中に就て皇子がうへと云名は、所様様に申傳侍。昔、龜山法皇毎年熊野へ御幸成玉ふ。其絡路に九十九所の皇子を勸請在けるとかや。此地の少西に當て一皇子の宮居有ける故、俗此所を一皇子が上と云けるか。又、菟道太子此邊にて飢死し玉ひけるにより、皇子の飢死玉ふ所と云詞とも云り。何か是也哉否。又、世俗の口談に、祖父が上と云付るもあり。其近所に少き成谷間の道筋あるを、祖母懐と名付け。今に於て婦人小子も能覺侍也。是又一事の戲談也。小子など祖母懐と云も、物の形に似たる所成にや。

此所を戸立野と云。古歌に讀てあり。即、古跡戸立野の所に記す。

右、此一巻の由来を當津の古人に尋、反古に書集日記より見出す。故に本説聊違事も有べし。

古跡 莊 二村五。南を鹽穴と云莊。開口、村木戸村。北莊を向井領村、中筋村、原村。三の村、是也。

### 九艘小路 附・九本松

神功皇后、三韓御退治の時、住吉明神は副將軍と成せ玉ひ、御歸陣の砌、御船九艘にして此海濱に上せ、御船を此所の松九本に繫玉ふ所を、舳松と云り。船の舳頭向故を以て所の名とす。其時の九本松在所は、今旭蓮社の内地の門前。鎮守七社の外一社有を九本松の明神と祝奉る也。然故に、此宿院の邊までも押並て九艘小路とは云り。

### 銚塚

住吉明神、御歸陣の砌、御銚を土中に埋玉ふ。其所は舳松村の南の近邊、不盡庵と云寺の門前、在家の軒端に塚あるを土人銚塚と云傳。或説に、住吉明神、御歸陣の時、御旗を立置玉ひし塚也。其後、此地も住吉の末社にて有しと也。所は右に同。又、明神の御銚は住吉の神官方に今に寶物として傳來す。

### 飯匙堀

地神四代彦火火出尊、鹽津翁三の村大明神也の功に依て海童に至り、豊玉姫と契玉ひて干珠満珠を掣引出物に得玉ふとかや。海童より還玉ひて、干珠は今宿院の地に埋玉ふ。其堀の形、飯匙の如成故に、世俗飯匙堀と名付たり。満珠は住吉の新家町の南、廻廊の畔、玉出嶋と云地に埋玉ふ事は、南は陽を取て宿院に干珠を埋玉ひ、北は陰を取て住吉玉出嶋に満珠を埋玉ふとかや。

即、九月晦日に神輿を此所へ移奉も、満珠をすずしめの為也。又、六月晦日に神輿を宿院の飯匙堀へ遷玉ふも干珠をすずしめの為也。六月九月は陰陽の御祓と云り。

神社考、住吉の條下に云、干珠満珠は紀州日前の宮に納。一に云、干珠満珠は肥前國佐嘉郡河上の宮に納となり。

予案ずるに、此等の義、博雅の君子の沙汰を待者也。

### 住吉御田植勸所

例年五月廿八日、住吉明神の御田を當津津守町の遊女、參植初也。或説に云、何の帝の御時にや、后悪瘡を愁玉ひしを、占侍るに、如何成宿因にや、諸人に面を顯玉はば平愈有べしと奏し申に依て、此地まで吟來、賤者の手に渡浮岩玉ひし時、所願の爲に住吉明神の植女に出させければ、悪瘡程なく平愈成せ玉ふ。故有を以て、今に此所の遊女、其例を勤けると也。

然に當津遊女町の暖簾に紫の耳を付事、他所に成ざる所為とかや。又、或説に、明神御歸陣の時、長門國より植女を召列玉ひて、五穀成就の爲植させ玉ふ。植女の子孫、後

に遊女と成し其例とかや。  
古昔は、五月の節に入て日取を撰。中興より二十八日に御田植を相定。植女は賀茂にも其例あるとかや。

### 七堂 七洞 七度 附・繼嶋 躍念仏

北 莊旅籠屋町の西に當て、七堂の濱と云あり。  
古昔、此地七堂伽藍の舊迹あるが故也。然に、此伽藍の迹在家となる。今の伽藍と云是也。  
又、或説に、何の時にや此浦へ四天王の像、浪に漾 上玉ひしを見れば、御影七つに分玉ふを取上、繼たて其所に安置せし所を七洞繼嶋と申とぞ。

今、七洞を七堂と書。是も一説あり。前に記す。  
異説に、住吉明神三韓退治の時、自 削玉ひし佛像也と云誤り。用に足す。

又、説に、七度濱と云り。住吉の神輿を昇居奉る者、身を淨んがため潮垢離を七度浴る故也とぞ。  
昔より躍念佛有しを、何の比よりか中絶してありけるを、當津大念佛の末寺琳昌寺に知三坊と云あり。此僧慶長年中に中興して、綾町大濱に草庵を結て来迎寺と號して、七月八日の前日に南北の勸進を請て上人を請待せしめ念佛修行、毎年退轉なし。

又、上人持来玉ふ扣鐘は、攝州關郡に深江法明とて念佛の道者あり。又、播州に賀古教信とて、是も念佛徳行ありし人也。去に依て法明は教信に逢事を願播州へ越れし時、此浦にて彼扣鐘を海中に沈しとなり。其後、此浦へ龜被上し鐘成故に、今に至て龜鐘と云傳り。

且又、元和元年乙卯七月八日に、大念佛の御本尊河内國平野と云所より上人守来て、毎年其日に至て此所の三昧に於て、法界無縁靈魂をすすめの為に率都婆を書て佛供を備、躍念佛執行し玉ふ。

### 高野堂

高野山弘法大師、歸朝の御時、北 莊九間町へ著岸有しとかや。其時、假堂を建玉ひて大師の御影を安置し、高野より往來の僧の便とす。世人、是を高野堂と名付たり。其後、宿院町へ所替ありと云り。

### 勢至塚

※堺市立図書館の蔵書には、「このページには、身分差別的な名辞、賤称が記載されています。これは基本的に人権を守る立場から言えば、不適当と思われる。本書の活用にあたっては、差別的助長、再生産につながることを、積極的に差別撤廃への資料として利用されるよう、特にお願いいたします。」と付言されている。

### 所は鹽穴の近所、穢多村の畔、近塚也。本は鹽穴堂也。

昔の本尊は勢至菩薩也。或時、此本尊損玉ひしを修復するに、程無又摧玉ふ事再三也。住僧、奇異の思をなす處に、或夜菩薩靈夢に曰は、此の海中に天竺の月蓋長者守觀音坐ます。此觀音を取揚奉りて勢至と對坐成べしと。靈夢分明なれば、其夜海濱を尋 出、海中に光明あり。急浦人を語、大網

をを下しに、觀音の尊體上せ玉ふ。然は勢至と兩尊、今に崇奉る。海中に久経玉ふ故、觀音には  
蠟殼藻屑など取付玉ふと也。

鹽穴縁起は紛失せるか。此義もなし。所の古老語しを、聊書載侍也。

### 朴津郷

此所は、北橋、東の野邊也と云傳り。又、天神記録には、北莊住吉郡朴津郷とあり。  
古歌に 住吉の朴津に立て見たせばむこの浦より出る舟人 讀人知ず と續後撰雜上にあり。

### 玉横野

所は南宗寺内利徳庵の側、南野を云とぞ。古歌に、  
終夜露の光りをみがくなり 玉のよこの秋の月影 讀人知ず と新拾遺雜上にあり。又、  
雲さそふ峯の木枯吹なびき 玉のよこの霰ふるなり と藻鹽草にあり。

### 戸立野

此所は、世話に、祖父が上の下なる祖母が懐、と云説あり。古歌に、  
いづみなる堺の浦の戸立野に 春はあけたるかぎわらび哉

### 目口町

住吉明神、御歸陣の時、神馬を此所に係玉ひし時、秣を備しより、此所を根口町と云。今、俗に目口  
と云習せり。

毎年六月御祓に神馬に秣を進る事、其例を勤来り。  
又、清祓錢とて南莊十四町より鳥目を集、神輿の先を清祓する宮子に参せ来り、則南莊  
職事役にて、是を禰宜に渡す。

### 占辻

市町と湯屋町との間、大小路の辻を云り。此辻を泉攝境目南北の分地とする所也。  
昔、安陪晴明、泉州篠田村より経過の時、後來人民の爲にとて占の書を此に埋り。今に此所にて辻占  
を聞に、正違事なしと云り。

### 釣狐寺

南莊少林寺の塔頭、永徳年中に耕雲庵と云あり。其住僧伯藏主と云り。此僧、鎮守稻荷明神を信仰  
して毎日法施怠ず。或時、神感應有て森の中に三足の野狐あり。抱歸て養愛す。此狐に靈有て、隨任用  
を達して賊難を追事あり。其孫孫三足にして今に至り寺内に住居す。稻荷の靈驗新也。  
世に云傳釣狐の狂言又、吼噓共いへり、此寺より發り。然ば才覺なりし狐の謀なれば、其時

大藏某、狂言に作しを、彼狐感じ老翁に化して狂言を見て、猶野狐やこの骨髄動を口傳せしとなり。誠に狂言綺語とは云ながら、道に達しぬれば如是奇特も有事にや。尤家の大事とする狂言也。

### 鹽風呂

泉南の風呂は、行基菩薩、海邊に井を掘、此井中に石像の薬師佛を安置す。奇なる哉、海邊たりと云共、其如來の胸中より清水涌出す。此水を風呂に用入湯す。諸人の衆病悉除す。

文龜二年壬戌正月三日、暁天に屋敷主人萬貫屋妙徳に、多門天告玉はく、寺物ならずんば井水退轉せんと、新なる靈夢を蒙。然に依て旭蓮社へ寄進し、寺内に寶塔を建立し、弘法大師一刀三禮の多門天王を安置す。都鄙の尊卑、晝夜市をなすこと日日に盛也。

天正年中に、豊臣朝臣太閤秀吉公、有馬湯治の後、此風呂へ入湯あつて不日持病平愈す。其靈験を感じ、諸役免除し御朱印を賜。刺吏石田隱岐守政成に仰付られ、定條目を天正六年戊寅十二月二十日に下賜る。其條目今にあり。相次て當家御代代御朱印下さるる者也。知行四十石受納す。

此風呂の在所は大町の西六間筋、即町の名を鹽風呂小路と云來也。

### 市戎并大黒町

此戎は石體也。昔日、弘法大師、當境に暫坐し時勸請なされて、所の人、市を催し時の鎮守也。

實に時移事去ぬれば、其義を知る人も希にして、今は民屋の軒端に纔に星霜を経許にてあり。然ば此所を市戎町とは申也。

又、大黒町と云あり。是も大師、大黒天を勸請し玉ふ故也。

### 向井領井

向泉寺の領内、向井領の地に行基菩薩の名井あり。在所は向井領の三昧南の側に在。此井水にて諸瘡を洗用し、又は薬煎の水に用て平愈する。

因縁を尋ぬるに、天平癸未年、行基菩薩、此地に闕伽井を祈。其奇瑞の故也。由来は寺觀の所、向泉寺記録に委記す。

### 海會寺井

此井は大寺門前にあり。昔は、海會寺開山乾峯和尚へ、鬼面龍神、老人と成て参に上り、其法恩に報し為清水を與んとて、龍神の云、鵜の羽を地に指、露の多浮方に井を掘と教。和尚、其詞の如く仕玉へば、案の如く清水漲出たり。是正慶年中の事也とかや。

其老翁の歸方を人に見せけるに、傍近所にて姿を見失けると也。其所を、時の俗名付て蛇谷町と云來り。

今に其名は残り。海會寺は今南宗寺内に寺地を構たり。昔は大寺の門前に在と見へたり。

聾井

此井は、文明四壬辰歳に、今林六郎三郎より代代傳て、時に寛永四丁卯歳、一向宗萬福寺の支配也。

聾井と云事は、井守聾成故に異名を像り、此井名井なるとて秀吉公の御時の茶湯の用水とせり。

高須

北莊町の入口より東に高須と云町あり。此所に遊女今にあり。古昔も佛と云名なる白拍子ありとて、名を替て地獄と付たる遊女ありければ、紫野真珠庵一休和尚遊行の時、此由を聞玉ひて、一休尋寄て、

ききしより見ておそろしき地獄哉 とあそばしければ、地獄、

いきくる人もおちざらめやは としければ、和尚聞玉ひて感に絶玉ひて、即此二句を書て遣され

しと也。

又、半井卜養、當津住居の砌、狂句、

南北のみな鳥どもがとらるるは ただ一もつのたかすなりけり

首截地藏

此薩埵は行基菩薩の作也。

北莊、皇子が飢の北の邊に草庵あり。昔此所に藁屋の辻堂ありて、西國順禮高野山通路休所の為

にありしに、夜な夜な奇恠の事あり。或夜、道行人と往會て化生の者を截留たり。明て見れば、即石地藏

也。其より名付て今に首截地藏と云傳り、諸願祈に驗あらずと云事なし。其時の太刀疵の跡、現に拝

し玉ふ也。

古事并戰場

此戦場の仕官は、信長記、太閤記、其外軍書よりぬきいだし、此にしろすなり。

細川清氏

細川相模守清氏、四國を討平て、今一度都を傾、將軍を亡奉んと企、堺の浦より船に乗て讃岐へ渡る。

細川氏春

細川兵部少輔氏春、淡路の勢を卒して兵船八十餘艘にて堺の濱へ著。

赤松弾正氏範

五百餘騎、弾正少弼氏範に付て、船に乗、堺天王寺へ押寄。

大内義弘

應永六己卯歳十月、大内左京大夫義弘、築紫中國の兵をひき井て泉州堺に著て上洛せず。

三好海雲

享禄五壬辰歳六月廿日、三好筑前守長基、泉州堺津に至て畠山高政と戦て敗績し、頭本寺に入手、自臍腑を繰出天井に投生害す。南宗寺殿海雲善室、是也。

三好宗三

天文十八年己酉六月十七日、神五郎政長入道宗三、攝州中嶋江口城に於戦死す。歳四十二。曾て攝州童子山の城退治の時、宗三を大將にして堺南端に陣を取てぞ扣へたり。

將軍源義尹

永正五年戊辰正月、大内介多多良義興、京都の亂に政元が死を聞て、時分よしと思、前將軍源義尹を取立て築紫中國の勢を催上洛。四月、細川左京大夫澄元、京を没落し阿波へ退。將軍源義澄、京に逃出て江州へ赴き、佐佐木を頼る。義尹、泉州堺まで到著す。

三好實休

三好豊前守之康入道實休、永禄五年壬戌の比、泉州久米田合戦の時、紀州廣浦に畠山高政世を假初す。住居にておはすを、紀州河内の人人、大將にとりたてて二萬餘騎にて攻蒐る由飛檄頻並に告ければ、三好實休後詰せんとて出向。堺の津にて人數を揃、阿波讃岐伊豫の勢都合一萬餘騎、篠原右京進長房を大將として岸和田の城に籠けり。久米田に陣營す。何方よりか来けん、流矢一筋来て實休の胸板に

のぶか 籠深にずばと立。受も堪らず馬より落て永禄五年壬戌三月五日に卒す。歳三十七。

### 松永弾正久秀

まつながだんじやうひさひで  
えいづく 永禄十三年庚午、久秀と信長と戦時、松永より泉州堺へ文を遣、加勢こはせけり。其使は筒井  
わかたけゆげの 若黨弓削三郎と云者也。此者、信長へうらがへり、松永腹立すと云り。

### 信長公

のぶながこう  
信長公、佐久間右衛門尉信盛、同く甚九郎信榮父子に折檻の詞に云、参河尾張近江大和河内和泉紀伊  
いじやうかこくうちを井 数箇所の與力等付置し間、自分の勢を相加一戦を遂候共、さのみ越度はるべ  
已上七箇國の内にて、數箇所の與力等付置し間、自分の勢を相加一戦を遂候共、さのみ越度はるべ  
からざる處に、一向武道には立入らず。堺の町人の腹脹共を召寄、數奇三昧のみ専とし、徒に年月を空  
せんこと了簡の及所にあらず。畢竟數奇は天下國家を治為に利益たるか損害たるか申べき間、予が存  
する處は、若益たらば、甚九郎信榮自然に武道の冥加有て敵を擒にし、父が面目をも施、其身武勇の名  
をも擧べし。若利たらば、信長に忠し父に孝して、天下の守有て永榮べきか。然ざるるときんば其分別有  
べき事。

### 東照大権現

とうせうだいこんげん  
大権現、安土發、洛中周覽且和泉堺遊す。信長公、長谷川竹以之副、以て案内者す。  
また、たうつめうこくじ 又、當津妙國寺に御旅館をトさせ玉ふ時、信長公、信忠公の御事を聞届玉ひ、此勢にて合戦して孝養  
にせんと、頻に宣つつ悶焦し玉へ共、中中小勢の體にては叶申すまじ。重て義兵を擧、彼逆徒を亡  
させ候へと、酒井石川など達て諫申すにより、伊勢路を指て夜を日に次急せ玉へ共、剛兵は疵つく事  
なしと云し如く、一揆の奴原群、渡て物欲さうには見へしか共、中中手指事を得ざれば、三日の午刻に  
は伊勢國白子に著玉ひて、其より御船にて尾州智多郡大野へ著津有て、故なく遠州濱松に至て御歸城あ  
るこそ目出度けれ。

### 秀吉公古今數奇沙汰の事

ひでよしこうここんすきさたのじ  
雍州の伏見殿下、居城御定有て、漸石垣三重三重出来ければ、早御臺所長屋など立て、作事此彼に急  
也。山下の河邊に二十丈に山を築上げ、諸木を植並、枝を垂葉を敷、深山の如し。松栢生茂し中に堂塔伽藍  
を建並學文所と號し、古今數奇の沙汰あり。珠光古市播磨守北向道陳などが流と引合、其中の宜に  
付沙汰仕候と説玉へり。

### 納屋助左衛門呂宋より歸朝

なやすけ 泉州堺津納屋助左衛門と云し町人、小琉球呂宋へ天正初夏に渡、文禄三年甲午歲七月二十日に歸朝  
せし其比、堺代官石田木工頭政澄にて有し故、奏者として秀吉公へ傘蠟燭千挺活麝香二疋上奉り、  
御禮申上、即真壺五十御目に懸しかば、特外御機嫌にて、西丸廣間に並つつ千宗易などに御相談

これあつて、上中下段に代付させられ札を押、所望の面面誰誰によらず執申と仰出さるる也。茲因、望の人人、西丸に伺候致、代付に任五六日の中に悉取て三残しを、秀吉公へ召上られ、金子請取り、助左衛門五六日の中徳人となれり。

### 完殮屋

長宗我部元親、元龜三年壬申巳に土佐一國の主君と成て、武名も天下へ聞たり。或時家老を召て云けるは、今七雄號鬪の時至て天下に主なし。畿内も三好嫡子絶て一族等漸城を守のみ。此時天下に望をかけたまひしは、尾州の信長、参州の家康公、甲州の信玄也。信玄は道遠、二将海道に塞玉ひければ、其功業立がたし。唯信長のみ公方を都へ仕居申し、上は天下を領ぜん事近かるべしとて、堺の町人完殮屋と云商賣人親く出入するまま是を頼まんとて召出し、信長公への通路の便とせり。

### 九鬼右馬允嘉隆

天正六戊寅歳十月朔日、信長公、大坂一向宗頭如上人の御一戦の砌、右馬允を以て船中の指引を泉州堺に於て御上覽あり。其節、堺の富家の者共より御座船二艘を金欄段子を以て是を飾立捧奉る。公方、御機嫌宜と也。

又、西國より大坂へ船の出入自由にして更に屈すべき體なければ、右馬允、大船數百艘付られ相支ふべき旨去年より仰付られしかば、泉州堺津に於て越年しけるが、年頭の御禮申上んとて、天正七年己卯正月五日に、安土へ参著せしかば、久苦勞の由仰有て、黄金二百両小袖三重賜て、本國勢州に下り暫休息すべしとて御暇くだされければ、右馬允畏悦て國に下ける。

二月十八日御上洛有て、二條新造の御所へ渡玉ふ。又、天正七年己卯七月下旬、右馬允、泉州堺浦へ上り、紀州雑賀の一戦に赴。同く九年辛巳、大船數千艘大坂へ押廻、敵船の通を支申すべしと御誼有ければ、去六月廿六日に伊勢より紀州熊野へ押出しけるに、雑賀、浦浦より賊船五百艘許乗かけ攻ける處に、右馬允、船を會釋近寄て弓鐵炮を射懸、船の櫓より炮烙火箭を投入、攻捕と云ければ、兵共承て一命を海上に棄、前後を顧ず攻懸攻懸、矢場に三十餘艘乗取けり。九鬼右馬允、心地よき船軍して、七月下旬に泉州堺浦へぞ上りける。

九月廿三日、信長公御上洛有けるが、越中國一揆共蜂起せしむる由注進有けるに、齋藤新五龍興馳参退治致べき旨仰出されければ、承て急發向す。同廿七日に、右馬允が大船共御覽有べしとて、信長公住吉へ著津仕玉ふて、同じ廿九日に安部野に於て御鷹狩し玉ひ、角て船も御覽の事は天氣次第と定らるる。十月朔日天氣穩に風静なれば、彼大船共を旗指物幕などにて夥く飾立、浦浦湊湊の兵船共迄も其手其手の船幟我劣じと美麗盡けり。推分て船軍の様子仕て見せ候へ、剛弱の御指南有べきとの御誼ありければ、雑賀表の兵船共と打戦て勝軍せし様子を憚處なく下知して御目に懸申ければ、殘處無と御感にてありけり。

# 寺観

## 大経寺旭蓮社 甘露山

開山は智圓上人澄圓と號す。何の所の人と云事を知ず。初は台家に入て奥義を極、其後廣諸宗の旨を盡。終に宋に入て廬山一流の宗脉を傳來し、歸朝ありて此地に來、白蓮池を湛、此寺を建立し、甘露山大経寺旭蓮社と名付玉ふ。

是於八宗兼學の道を修行し、論文を制作し玉ふ事數百卷也。或浄土家には脉の譜訣を授玉ふ。然ば社號の始祖たる事明也。彌浄土の教を都鄙に弘らるる事多年也。是惠遠流義の摠本也。

此如の徳、隠無が故に、村上天皇 忝も大乘菩薩澄圓と諡號を賜。其上、大阿彌陀経寺と云額を下し玉はる。誠に希代の盛事也。

世に普澄圓菩薩と申事、所為有事也。其後、應安五年壬子七月廿七日に、何國共なく失玉ひぬ。門徒、其日を記して忌日とし奉也。

中比、太閤秀吉公、四十石の燈油料を下さる。當御代に至まで相違なく御朱印頂戴し奉也。鎮守七社明神

寺家の内に聖譽上人玄怒老師の住玉ふ寺あり。其寺内に上人の塔あり。念佛長 行の道場也。又、鹽風呂の事は古迹部に記す。

## 向泉寺 三國山

開基は行基菩薩也。

初聖武皇帝、行基に勅を玉はり、伽藍を作、千手觀音を安置せしめんと也。是於、行基、泉河攝の堺に來寺を建立し玉ふ。先阿伽井を祈に、忽清潔成水涌出たり。茲因、寺を泉に向と云より向泉寺と名付玉はる。又、俗には向井寺とも云り。

悪瘡眼翳諸の痛痒有者、此水を汲て洗浴すれば驗有、と云傳たり。是、泉河攝の三國に臨寺なるが故に、三國山と名付、別には遍照光院と號す。鎮守は祇園牛頭天王也。門前の民家、氏神と仰奉。

永正年中兵火に罹て、堂社道場神殿僧坊、忽に滅亡す。其後、寺を境の里中に移す。昔日の本尊什物等、今猶歴然たり。鎮守の神殿は古跡に坐す也。

正月五日、六月十四日、八月五日、霜月十四日を祭禮の日として、今に至迄絶ず。秀吉公の御時、故有て封田九十石下玉ふ。當御代に至迄、相違なく御朱印を頂戴し奉也。

## 悲田院 法護山

開基は思計上人、諱衆徳也。俗姓は源氏。江州の佐々木家の侍 某が家の子也。相傳、熊野権現の再誕也とかや。

長成て出家學文し、念佛の宗旨を尊、天文年中に此津に當寺を建立して、恵心の真作の阿彌陀如来

の尊像を安置し玉ふ。

其後、十方の衆を勸て淨財を抛しめ、上人自十萬卷の彌陀經を書寫し讀誦し玉ふ。

一夕、熊野権現靈夢ありて、此寺を十萬と號すべしと宣しより今に至迄、寺の別號とす。

又、上人、市に出て乞食し貧人を助玉ふ故に、悲田院と申也。

秀吉公の御時、采地五十石の許を下し玉ふ。當御代に至迄、相違なく御朱印を頂戴し奉る。

鎮守辨財天は弘法大師の彫刻也。靈驗あげてかぞへがたし。

## 極楽寺 清浄山

開基は行基菩薩也。本尊の中尊は、阿彌陀如来八尺の坐像、行基菩薩の真作也。

昔は寺内に法界引導の墓有。其邊に地藏堂を構たり。

嵯峨天皇の御宇、其由緒を勅問有て、堂を御再興あそばされ、清浄山と勅號を玉はりければ、此地

大伽藍所となれり。

寺内に室を構、比丘と比丘尼とを相別、薰鍊せるとかや。然に、此境民居繁榮して墓所の近事を厭

が故に、其墓所并に地藏堂を野邊に移して、同比丘も其地に隨來しにより、此寺は一向に尼寺と

なれり。

終に佛閣僧坊、年を経に隨て零落す。剩兵火に罹て佛像寶物焼失す。其後、覺心大師と云者發願

して、中比秀吉公の御時、知行二十石の所を下し玉ふ。當御代に至まで相違なく御朱印頂戴し奉る。

## 金光寺

開基の師、何人と云事を知ず。傳云は、人皇五十四代仁明天皇の御宇、承和年中草創の寺とかや。

御本尊は、藥師如来也。當浦の海中より漁翁の網に懸て上せ玉ふと云り。

昔は何の宗を行したると云事も貞ならず。其後、天台宗の道場となれりと云共、貞和の比寺院炎上

してより當境の引接寺智演上人に歸入して末寺と成。即其時の住持を往阿彌と號す。

文和元年壬辰に再興造畢す。

本尊の靈驗奇特あげて筆し難し。諸人普存知せる事なれば、今更記すに及ず。中比秀吉公の御時、

十九石の祭田を下さる。當御代に至迄、相違なく御朱印頂戴し奉る。

又、此寺を俗に網道場と云り。御本尊、海中より網に懸上せ玉ふ故にとかや。或人の云、往阿彌の比

より中興して繁榮の寺と成しかば、阿彌道場と云來るとも云り。

堂前に藤有。人王百一代後小松院の御宇に及で、此藤を帝聞召て、即帝都へ移植させ玉ふに、程

なく枯にけり。或夜、帝夢中に、

おもひきや塚の浦の藤浪の都の松にかかるべきとは

と御夢想ありしに依て、正く彼藤の精靈の玉體に奏し申しけるよと御感有て、勅筆に歌を遊され、又、

御製を添させ贈返し玉ふを植置しに、程なく榮て有し由を帝都に聞召て、又御詠吟を下し玉ふ。此

御製共絶て今はなし。國俗の謡物に其時の首尾を書連吟弄せるものなり。

又、當寺にて歌の會有し時、住持覺阿彌の比、肖栢、  
聲をせる友ならずやは下荻に ならの枯葉の野邊の朝風

### 南宗寺 龍興山

開山は正覺普通國師大林和尚也。

弘治二年丙辰に創建の檀那三好修理太夫長慶也。先考筑前太守元長入道海雲齋善室慶公の為に建立也。  
即南宗寺殿と云り。當津頭本寺に於て自害す。

澤庵和尚、中興す。本寺、洛陽大徳寺也。

佛殿と法堂と兼たる堂一宇有。山門は甘露門と號す。開山の影堂は曹溪庵と號す。

中比、秀吉公の御時、封田一百十石下し玉はる。當御代に至迄、相違なく御朱印頂戴し奉る。

當寺へ御成。台徳院殿 元和九年 癸亥七月十日、大猷院殿 同年八月十八日也。

### 禪通寺

開山は大聖禪師、諱宗然、字可翁和尚、生國筑前の人、師匠は大應國師南浦也。

檀那は、南帝後醍醐天皇の臣下、西園寺左幕下諒空大禪定門、同武臣石堂右馬頭頼房、此外、梶原の子孫道山行公。庵主親子六人大檀那として、嘉曆年中諸伽藍悉成就し畢ぬ。

開山遷化は、貞和元年乙酉四月廿五日也。其昔は建仁寺天潤庵の末流たりと云共、回祿の災に依りて諸堂焼失す。故大徳寺の前任黃梅院春林和尚、伽藍再興に依りて即中興す。彌今に至りて黃梅院の末派たる者也。

中比、秀吉公六十石の領田を下さる。當御代に至迄、相違なく御朱印を頂戴し奉る。

### 大安寺 布金山

開山は秀徳和尚、應永元年甲戌の草創、本寺は洛陽東福寺の塔頭莊嚴藏院也。

御朱印二十石五斗頂戴し奉る。

### 海會寺 宿松山

開山は廣智國師、諱士曇、字乾峯和尚也。即、聖一國師三世の孫也。

正慶元年壬申草創す。本寺、上に同。此寺地、元和兵亂の前迄は三村明神の西の門前に有。今、南宗寺の内に入て一坊を構。

御朱印三十石頂戴す。此名井の事は古迹の部に記せり。

### 引接寺 勅定山

開基の師は智演上人也。人王九十七代光明院の御宇、貞和三年丁亥建立也。

本尊は阿彌陀佛也。是、住吉明神の御作の靈像と云。舊記に見へたり。

其比、三宅氏五郎三郎と云者、當境に好有て住居す。其家富りと云共、佛法の名字を知らず。其子重五郎と云者、孝行、且つ又佛神を信仰す。常に父母の菩提心なき事を歎。時に釋阿と云人有。信州より當境に來り、念佛修行懈り玉はず。一郷悉、深信せずと云事なし。彼重五郎も師に觀奉り、益悦て信心堅固也。貞和元年乙酉初冬、五郎三郎病に臥り、醫療秘術を盡共、甲斐無死期既に極れり。重五郎深歎き、正月二日に住吉の神社に誓て、七日断食し潔齋して、長坐不卧、口に彌陀の寶號を唱、父の病苦を救事を祈。其上、此願成就せば一夏の間毎日寶前に參詣し禮拜恭敬し奉んと發願し畢て後一七日、満ずる寅の刻に當て、夢中の如く御殿震動し、新る御音にて神勅有て宣、吾刻處の無量寿佛、境の浦に有。其尊を求め奉り、精舎を建立して常恒念佛せよ。汝が諸願速に成就せんと示現坐ければ、奇異の思をなし、海邊に至り、神命の如く尊像を守奉り、却て父母に拝せしめ、終に七日七夜の別行開關三日未満ざるに、父の病平愈す。是より彌佛に歸し、神を仰て怠ず。終に七堂并四十二院を建立し、八月八日釋阿比丘を請じて入佛供養の尊師とし、且開基の師と崇奉る。光明院、勅許有て、即ち山を勅定山と號し、寺を引接寺と下さる。其上、釋阿比丘に智演上人と云別勅を玉はる。綸旨猶歴歴たり。

是於、重五郎入道發心して、名を專阿と改、念佛誦經休時なし。毎年正月八日、阿彌陀の法號を書て、住吉の神社に納奉る。是即ち、專阿、父の病を祈し時の結願の日也。其因縁に依て此如と云り。

此寺を建立する時、住吉社務金紫光祿太夫「國夏」、此地を以て如來に寄附せられ、且又、依羅明神并勝軍地藏を勸請して此寺の鎮守とせり。即是も住吉の末社と成り。三宅五郎三郎、後に主計頭と受領して當境の司となれり。

抑引接寺は念佛最初の寺成が故に、近國の門派の宿老たる者、先此寺に入て法談念佛執行して、後に各其寺に入院すと云や。

應安二年己酉の初冬より、洛陽四條の道場の末寺と成故に、當寺をも四條と云傳り。

御朱印十石三斗頂戴す。

### 經王寺

開山は日延上人。應永年中に建立す。本寺は洛陽妙覺寺也。

御朱印二十六石頂戴す。

### 顯本寺

開山は日浄上人。文明十三年辛丑、建立也。本寺は洛陽本能寺と尼崎本興寺と也。

御朱印二十七石頂戴す。

三好筑前守元長「最初は薩州大守に任ず。名乗長基と號す。」、泉州久米城の戦に勝利を得ずして、享祿五年壬辰六月廿日、當寺に於て自害、腸を爪で天井に擲つ血痕、大坂一亂迄あり。

光明院

開山、心地念空上人。永正年中に建立す。四修兼覺の道場也。本寺は洛陽西山三鈿寺也。御朱印十八石頂戴す。

天正十年壬午五月、穴山梅雪、當寺に旅宿して、六月に宇治田原にて討死す。

櫛笥寺 本教寺とも云

開山は本住院日染上人。明應元年壬子に建立す。本寺は洛陽立本寺也。御朱印一石一斗頂戴す。

右十四箇寺に天神の常樂寺、三村念佛寺を加て、俗に十六箇寺と云り。何も其寺寺、由緒正殊勝靈地なれば、中比、秀吉公の御時、別別に御封田を下され、泉州踞尾村に於て納所す。當御代に至迄、相違無御朱印頂戴し奉る者也。故に天下の御祈禱毎日の香華退轉なく有難き勤行也。摠知行高八百三十石九斗也。

妙國寺

開基は日珖僧正。永禄五年壬戌建立す。

中比、秀吉公より封田下さる。當御代に至迄、御朱印百二十石頂戴す。攝州關郡桑津村にて納所寺建立は油屋常言、寺地は三好實休寄進也。

此寺に蘇鉄一根有。高二間一寸、根廻三間二寸有。枝木共に十三本也。誠に希代の珍物也。

且又、天正十年壬午五月、家康公御上洛、直に當寺に渡御有。六月に入洛し光秀を討んと議す。御家人の諫により直に遠州へ御歸城。又大坂冬陣の時も渡御成て、御機嫌宜と云り。

大友義鎮入道宗鱗は秀吉公へ一味せんとて、天正十三年乙酉三月下旬に豊後國より舩にて揚、當寺に旅宿す。

又、妙國寺院殿光徳實休の舍弟安宅木攝津守冬康、當寺連歌の會の時、座席に出てられて、前句に古沼のあさきかたより野と成て とあるに、

冬康すすきにまじる葦の一もと と付玉ひてより、舍弟討死の由を申され、座を立玉ふと也。且又、法名龍音寺殿以徹實休、當寺の石塔には、妙國院殿光徳實休と有。

北御坊

西本願寺 信證院

文明年中に、樅木屋道頭と云者有。開山親鸞上人より八世法孫蓮如上人信證院と號すを信仰し奉、此寺を建立し、直に信證院と名付て道俗參詣する道場となせり。

昔の本尊は聖徳太子の御作也。今の本尊は御長三尺一寸四分 但白毫より御足まで。故有て十二代の准如上人自如來を刻玉ひ、御足の裡に御判許にて之造と有て、御名はなし。今の御堂に安置せら

るる處也。昔の本尊は、今江戸の御堂に移奉らるる也。

御朱印三百石の内二百八十石は泉州踞尾村、同く二十石は城州山科郷にて京本寺へ納所す。

右十六箇寺の外二箇寺入て、御朱印所合十八箇寺、是迄也。

### 南御坊

東本願寺 羅漢院

慶長年中に、西然寺二代善順と云者、開山親鸞上人より十一世顕如上人の法孫教如上人を信仰し奉り、真言宗羅漢院と云寺有けるを再興して上人に奉り、道俗男女の参詣の道場となせり。昔の院號を今に至て呼用。御本尊は太子佛也。

### 鹽穴寺

開基、詳にせず。本尊は十一面觀音也。和銅年中、元明天皇の勅にて造營有けるとかや。

此本尊は、當津海中より上せ玉ふ故、蠣貝取付腰籠有と云り。舊記、何比よりか紛失す。本尊の來歴は、古跡の勢至塚の所に記す。

### 專修寺

開基は玄譽上人。永祿元年戊午、六十三にして當寺を建立す。

古昔、玄譽初て當津に來玉ひし時、前に同津西向寺を建立し、淨土門を開て道俗貴賤を導玉ふ。是於、西國著岸の舩人迄も参詣し、結縁に預ずと云事なし。其後、當住建立し玉ふに、彌徳義大に弘り。修行益熟し玉ふとかや。

此上人、何の所の産と云事を知ず。天性聡明して耳目の触處臆記して忘す。淨土の三部を東関に學、天文年中に洛陽に入て、講經論談し玉ひ、群旨を導玉ふ。如是名徳成が故に、宇治平等院を再興し、南京に走て説法化導し、泉州綾井と云村に專稱寺を建立せらる。又、或時は自靈夢を感じ、其像を刻で安置し玉ふ。又、杖の頭に刻で安置す。其杖今にあり。行住坐臥念佛三昧の外他事なかりしかば、自臨終の時至事を知、手に彌陀經を握、端座合掌し佛號數百遍唱、面見彼佛阿彌陀佛即得往生安樂國と云文を誦し、春秋八十二歳にして入滅せり。時に天正五年丁丑五月廿七日也。

初大坂一心寺に至玉ひ、元祖法然上人の遺跡を拜玉ふ。既三百餘年を経たり。故に寶殿零落して、佛像風雨を凌玉ふに所なし。是於、見にしのびず淨財を抛て再興の功終しかば、住持比丘、此信實を感じて、一心寺代代より奉持せる元祖上人自筆の名號一幅有りしを、玄譽へ與らる。其名號の左右に一首の和歌有。

あみだぶといふより外は津のくにの なにはのこともあしかりぬべし  
是、夫木集、雜十六釋教の部に見へたり。此詠歌を書付玉ふ故、世に難波名號と申奉る、是也。今に至て毎年正月廿五日に開奉り、諸人の渴仰をなせる處也。

慶長年中に、大將軍へも御覽備奉るとかや。

### 少林寺

開基は桃源和尚、元徳年中に建立す。檀那小林氏成に依て小の字を用て書しに、彼達磨大師の少林寺を表して後に少の字を改けるとかや。

中比、紫野大徳寺の塔頭黄梅院の末派たり。

大坂落城以前は大伽藍にして、寺内は今の在家と成。寺地町少林寺町とて、今に其名を記せり。其両町の海邊迄寺内成し時、信長公へ召上られければ、其後秀吉公時代に公状有て、石田治部少輔三成、小西攝津守行長兩人として、少林寺屋敷竹木、疎べからずとの掟有。其上両町より地子を此寺に納。其後、堺町中の地子御赦免の時、同此両町の地子をも當寺より赦玉へり。且又、耕雲庵と云塔頭り。此庵に就て釣狐の故事有。古跡の部に記す。

### 妙慶寺 榮照山

日蓮宗日英上人、開基也。本寺は洛陽妙頭寺。

又、唱法師、天正年中に来て中興す。

寺内に日藏上人の自筆の石塔有。茲因、世俗に御石塔の寺と呼り。

抑此石塔は、日藏上人、西國弘通有し時、法華讀誦し、題目の文字を海上に書玉ひて、其誓願に云、吾弘處の法世に繁盛するに於ては此文字消べからずと心中に念じ玉へば、其文字波に洶れて消ざる姿を石塔に移、國七所迄立置玉ふとかや。

今、此石塔は其内の一基成事、分明也。諸人、信心懈らず立願すれば、諸病悉平愈せり。

### 了覺寺 光明山

當寺開基の和尚并年代分明ならず。古昔、洛陽黒谷紫雲山金戒光明寺より開基し玉ふ靈地成が故に、今に至迄本寺として由緒絶へず。茲因、當寺をも又黒谷と呼来れり。

初本山黒谷の上人、鑑池の邊にて水鏡にて刻玉ふ御自影有しに、正親町院人王百七代帝也、此影像を御信仰有て邊鄙に下し玉はば、朕も結縁あらんと浄土宗の勘文たる一枚起請を宸筆に遊され、上人の真影に添させ玉ひ、善秀と云僧に詔して當寺に下し玉ふ。茲因、近邊の道俗、渴仰の思をなし奉る。

扱又、御本尊は、和州當麻寺に御座有しを此寺に移奉るるとかや。抑此所以を傳聞に、昔、恵心僧都、母の善根の為に彌陀の三尊を自造立有て、同千體の尊像を畫、裏に御經を移、中尊を身内に籠て、當麻寺は彌陀来迎の地なればとて納奉せ玉ふとかや。然に善秀大徳、此黒谷に彌陀尊の坐

ぬ事を歎、朝暮上人の御影に祈願す。或夜の夢中に獨の僧有て云、汝が諸願満足せしめんと、御長三尺の佛像を玉ふと見て、夢覺ぬ。其翌日、何國共なく一人の僧、佛像を持来、善秀大徳に謂云く、是故有本尊とて、與去て、行方を知ず。寔拝奉れば、恵心の作也。吾本山黒谷常住の如来の分身也

と、歡喜身に餘、晝夜勤行懈事なし。至若年度の奇瑞勝計べからず。

其後七年経て、當麻の中尊こそ境黒谷に坐すと聞へて、當麻寺より取還奉んと他勢を催起來。是正に永祿十一年戊辰六月廿一日也。善秀大徳、熟熟おもへらく、憂喜轉變手を覆が如。世の中に存命してもよしなし、適祈で感得せし佛を奪取んも心うしとて、本尊に向捨身をなし終ぬ。當麻より來人人、此體を見て流石命に替し本尊なればとて、却隨喜取還奉ずして歸ぬ。其より本尊の徳光倍輝、威力彌剛して、日日月月に寺の繁昌、法の興隆、比類なかりしとかや。

茲因、次の住持、本山に請て此寺の號を望しかば、遍照庵と名付玉ふ。是光明遍照の謂か。其後、寛文年中に至て、了覺寺と改。誠に本尊并上人の御影、利益の深重成事、本山に恥事なきが故に、洛陽黒谷三十三世の上人、山號を光明山と名付玉ふ。

### 祥雲寺 龍谷山

開山は澤庵和尚、檀那は谷氏正安。寛永二年乙丑建立也。本寺、紫野大徳寺也。庭前に蘇鉄二十株餘有。其中、大也とするもの高さ一丈八尺に及。郷人、奇觀とす。當寺落成開堂の翌日、當津新刺史、從五位下土佐守石河勝正、使者を以て賀儀を述べられ、和歌一首を賦是を贈らる。

をのづから露の玉しく庭の面 さざれ苔むすいはほかさねん  
澤庵和尚和韻、  
詠 出和歌敷嶋跡 吟 聞新寺暮樓鐘 秋 其三 五夜中月 花 又八重猶一重  
和歌賜かへしに、

けふこそはをく露までも光ります ことばの玉をみがきそへけれ

### 長谷寺

開山は徳道上人。天平勝寶年中に造營す。  
初、上人、聖武天皇光明皇后の詔を承て、大和國長谷寺を建立す。本尊十一面觀音は、稽文會、稽首勲、三尾の杣木を以て作奉り安置す。其後、重て上人に詔有て、國國に新長谷寺を建立せしめ玉ふ。當寺は其最第一也。上古の記録、今に現然たり。

### 東光寺

開基は化翁道者。寛平年中に建立す。本尊は薬師如来也。初、化翁、此所の海中に日夜光明出現する事、奇特に思、網を入摸取に、此尊像を得奉る。是於、此寺を造立せるとかや。世人、濱薬師と云、是也。

### 西光寺

昔の開基は當津専修寺の玄譽上人也。照蓮社寂譽上人、天正年中に中興す。  
本寺は洛陽知恩院也。本尊は、慈覺大師の弟子寛印供奉の作也。并薬師如来は春日佛師、御長三尺

三寸の座像也。元來奈良帝の御守本尊たりしを、永祿年中に由緒有て、此寺に安置す。

### 善長寺

開山は頭空上人。昔日、洛陽粟生光明寺の住持たりしを、當寺の檀那三好因幡守政勝、元龜年中に去子細有て當津に寺地を求、子孫の菩提所に光明寺より頭空上人を住持となさしむ。

天正元年癸酉正月六日に遷化する。

政勝は、寛永八年辛未十二月十日に病死す。歳九十六。白骨は當寺に納。法名善長寺殿前因州賢通為三大居士と號す。

今に至て、三好氏より寺領之有。本寺、昔日は粟生光明寺たりしを、中興去子細有て知恩院の末寺と成。今の寺地は大坂落城後の替地也。

### 本成寺 遥寶山

開山は日親上人。嘉吉二年壬戌に建立す。

本寺、花落本法寺と本成寺と兩寺一寺也。本寺より七年以前に當寺草創す。然共、本法寺の隱居所とせし也。

日親在居の時、一牙を脱す。或時、一人當寺に来て告云く、是はこれ親師の牙齒也。汝に是を與。とく影中に納べし。是所命也と云終て、歎焉として見ず。檀那上京して此旨を親師に申ければ、微笑して答玉はずと也。尤牙齒を納し影像、今に有。

此日親上人は、初發心の時より志深、法の為には身を捨命を抛玉ふ。弘通の為に、人王百三代後花園院の御宇に、禁獄せられ水火の責に合、或風呂へ入て戸を閉、或男根を悩舌頭を切し故に、其音呻し玉ふ。又、或時は其頂に銅を焼焙しむと云共、佛力に因て恙なしと云り。去に依て、銅被の上人とは世俗に申也。

時の將軍義教公詰問して云、法華の行者を惱者現罰有と云、簡程汝を攻共罰もあたらす。然ば汝が法華經虚事にてあらんと也。上人答云く、百日を過ず其驗有べしと云云。然に、九十九日に當て嘉吉元年辛酉六月廿四日に、將軍義教公、赤松に害せらる。其時の落書に、

應永のよき年號をうちすてて 御所の首をば嘉吉元年

又、大内殿逃玉ひて後を截ければ、

逃とて後に手をば大内殿 うきよのはぢを嘉吉元年

又、細川伊豆守、臺所へ逃玉へば、御腹めされ候と云へば、觀世太夫が唐櫃へ逃入を引出されける時、猿楽のからうとよりも伊豆守 たすけたまへや觀世音ぼさ

此時、上人二十四歳也。太守、不慮に生害に及玉へば、天下の諸人の云、権者の上人を呵責せられし現罰也とて、時の人、奇異の思を成り。然ば、普廣院殿の忌中に出籠せんと有しかば、親師の云、吾身命は法の為に一度國主に奪たり。吾身ならが吾身にあらす、吾宗は不受謗施なれば、諸人受法化儀

なくんば 聊籠を出づべからずと云り。此時謗法の士女、此宗に歸する者多々也。御一家の衆も、當宗の法理強盛成事感じて、受法之有。其後、上人籠より出玉へり。末代希有の行跡にあらずや。然ば、今に至る當寺の御影に諸願をかくるに成就せずと云事なし。

日親上人、示寂長享二年 戊申九月十七日、八十二歳。

南北總寺庵數百八十六箇寺 九十五箇寺南 莊、九十一箇寺北 莊 此内由緒無は之 除。

## 仕官

### 三好存保

十河民部太輔一存が子也。

始三好修理大夫長慶の命に隨て、暫堺に居住して和泉河内の政道を執行。此故に政所殿と申也。今の町奉行を政所と云も、此例とぞ。

後に、阿州勝瑞城に居して長宗我部宮内少輔元親と戦しが、豊臣秀吉公の命に隨て豊後國年滿に於て、天正十四年丙戌十二月十二日に討死す。歳三十三、法名真光院義賢實存禪定門。

### 松井友閑法印

信長公の御時、堺の代官を友閑勤砌、元龜元年庚午四月朔日、信長公、濃州岐阜より御上洛あつて、京堺の茶湯名物珍器御上覽有べしとて、法印と丹羽五郎左衛尉長秀兩人に仰付られ、是を奉行すと云云。

又、信長公、事の子細ありて高野山へ催促の武士三十餘人遣されけるも、此友閑法印に仰付られけり。

### 松山新助

永祿年中に新助と云し、三好家に於て爪牙の臣に備し者也。

其始は、本願寺に番士など勤居たりしが、天性優に艶物每真成に、萬の裁判も長しう、小鼓尺八早歌に達し、酒を愛して興有し者也。

其比、堺の津にして三好家或方々の勇士或其家々に於て、司ある者共、此新助を呼出酒飲て浮世を忘、互に戦場に赴べき身也、誠に無は數そふ世に在て何を期せんや、唯隙々を求遊戯と云つ、敵味方、堺南北に打寄酒など愛し興ずる時は、當津の新助倡出慰しとなり。

### 小西如清

天正年中の比、當津藥屋小西彌十郎と云町人あり。富貴屋潤財寶巨累の者成が、福岡に居て備前國の浮田直家へ伽に出て親たり。

秀吉公、此者を召見玉ふに、才覺辨口成者なれば、汝浮田直家へ参て云べし。某も毛利征伐の使

として播州にあり。御邊も信長公へ一味して共に毛利を退治せられよ。承引に於ては美作一國を加恩申べきなり。此旨彌十郎承て即往て、三寸の舌を掉。直家大に悦て承引す。其動を以て、後に彌十郎太閤へ召出され、法體して如清と云。初千石を領す。

### 同く息攝津守行長并木戸作右衛門

攝津守行長、太閤へ小姓に出て大名となれり。肥後國を賜。宇土の城主也。

○同く家来木戸作右衛門は、高麗陣に手柄をせし故、是も後に受領して主殿と云り。此子孫、今に當津に居す。

僧道 そうどう

瑞溪 ずいけい

諱は周鳳、字は瑞溪。泉南堺の人也。臥雲山人と號し、又北禪號、僧録司也。

一休 きゅう

諱は宗純、字は一休。大徳寺真珠庵開山にして、住吉林菜庵の主也。初此所におはしまさん前に、先住吉の社に通夜し玉ひしに、八旬許の老僧香染の袈裟かけて居玉ひけるが、一休に問て曰、和僧何國の人ぞ。一休答て曰、都方の者也。僧、又云、都の人ならば定て歌や讀玉ふ覽と。一休の云、我も桑門なれど吾國の俗なれば今夜しも神明の手向にもや成侍んとて愚ながらも一首の幣に替奉り侍。

来て見ればここも火宅の宿なれば なに住吉と人のいふらん  
老翁の云、和歌尤殊勝に思侍ど、此翁さも存ず。

来て見ればここも火宅の宿なれど 心をとめてすめばすみよし  
程なく夜も臙と明侍ぬれば、彼老翁何地ともなく行方知ず。一休、然ばこそ是は明神の化現成らんと、此所に宿をしめ、牀菜庵を營 住玉ひけるぞと。世の人遍 知に依て、詳に載ず。

岐翁 ぎおう

昔日、岐翁は一休和尚の弟子也。一休の御心に背擯出せられ、當津市 町六間筋に庵地を求、集雲庵と號して住居せられしに、其折一路居士と宗祇とを頼、一休の免を蒙しとき、然ば吾太刀を持供すべし、又、集雲庵と云も似合ずとて南 坊と呼玉ひしと也。今に一休肖像の傍に太刀持しは、此岐翁也。尤活達力量ありし人と云り。其後、南宗寺へ寺地を移し、今の集雲庵開基、是也。

隠逸

沉南江

諱は宗沅、字は南江、濃州の人也。本は相國寺雲溪和尚の弟子也。

永享四年壬子、南莊葦原海濱に草庵を結んで隱居して、漁庵と號する道人也。又は鷗巢共云り。

一休和尚に相隨て拘子無佛性の話則によりて投機の頌作て一休和尚の稱名せられたぞ。其頌に

日、

妾是多情郎薄情 長門春雨愁 釀成 銀屏宛轉還飛散 乍有乍無啼鳥聲

寛正四年癸未の夏没す。歳七十七。

一路居士

一路は一休と同時の人也。或時、一休和尚、一路に問曰、萬法路有、如何是一路。一路答曰、萬事皆休

べし。如何是一休。

一路は詩作、歌詠。真の隱逸也。狂歌に、

手捕めよおのれはくちがさしでたぞ ぞうすいたくと人にかたるな

今、石津の上、市村の邊、一路庵の跡有。世の人、塚の内と思ふによりて爰に載侍。泉州の事跡は事多

ければ畧しぬ。後人、和泉一州の事を記し侍人もや有らん。

手捕とは手捕鍋と云釜一つを樂、此所に居住して人の往來を絶し、一の簣を下て 志 有人に食物

を受けて朝暮送れしとぞ。

或時、童共馬糞馬の沓鞋など入て置ければ、其を見て最早世は末に成たるとて、其より断食して終

られけるぞと申し傳。品は替共、真の隱者也。伯夷叔斉ともいひつべし。

其、誰の氏の子と云事を知ぬぞ。怨く其身はかく有しかども、其名は今に留りて其所を一路山と名付

て、世の人普知ずと云事なし。

手捕鍋、今は細川殿に有由申傳り。昔作る詩に曰く、

節後黄花吹飛ず 籬根雨 臥薔薇 似 萬年峯 頂新長老 咲禅 牀 下布衣對

其比の五山の名僧達、各贈答の詩有。

牡丹花

扶桑隱逸傳に云、牡丹花具平親王遠孫也。早塵俗出名、肖柏以す。又、自牡丹花稱。人皆

隨之呼。

喜 書讀和歌詠 兼連歌善 自然齋宗祇徒學 又、每五岳遊詩 作 解 其 出 必 牛 騎。

乃牛角塗金色為 觀者怪 笑、自若也。

老 垂隱攝州池田下。顏夢庵曰、長松花樹、簷環。又、四時花以次第之を栽故、其の

軒 榜弄花曰、性、酒好香愛。花 併三愛為。自記作。

永正七年秋、帝、夢牡丹花見、乃藤公實隆命、便殿召見。親唱和。葛巾服。觴咏樂。  
のちにお井て、せつものらんをさげんでせんなんにうつりきよす  
後、於、攝亂、避泉南徒居。

大永七年丁亥四月八日に卒。歳八十五。

又、春夢草に云く、永正七年庚午八月十一日夜、禁裏御夢想の事承て上洛せしめ、御會に參、  
剌發句を申べきやうに有しかば、兎角申上るに及ず申し侍り、過分共中々申にたらぬ事ありき。  
其夜心中につづけて侍し、

及びなきほどは雲井の夢うつつ あやしき身とおもほゆる哉

御夢の中よりの次第を記し留たきよし、前の内府に頼に申しかば、筆を染られ侍を、ここに記置者  
也。

さいつの比、うちの帝の御夢に、先皇の御代、御連歌有べきにて發句は肖柏法師申すべき由有しかば、先  
うちうちに御覽有たき由、當代の仰事成しに、發句にをきては當座に申すべし。歌の心におなじ風情を思  
めぐらし侍とて、

あし曳の山とをき月を空にをきて 月影たかき末のかけはし

と云歌を申上たりと御覽せられぬるよし語 仰られしかば、さてもめぐらかにも有難かりける御事哉。

天曆以前の歌に取ても、正く柿本山邊の風體の外、かかる稀にやあらん。本より凡人の見る處にあら  
ざれば、凡慮の所詠にあらざるべし。おほよそ青雲紫宸の夢に入類、唐には傳野の遺賢の舟楫輔佐の名  
を残、巫山の神女の雲雨妖艶の情となれるためしもそこらを聞ありけん、今此老法師のかかる言葉を

きこへありぬと叡慮を驚ければ、古今道絶たる事にこそ年比夢庵と呼来けるもかかるべきことの讖の  
文にやと迄、危おぼへ侍しかば、折節便に文つかはす次でに記し送しかば、思にもこへたる感悦手  
の舞足の踏所を知らずとて、九月十日のほどにふりはへのぼり来られしも、誠にやさしき志なるを、同  
十三日空の気色こころよく晴て吾國の月の名も實甲斐有ぬべき折なれば、御連歌あそばさるべし。彼老人

召具し候べし。發句は下官申べきよし仰られしかば、此事を思出て、さらば私に相ゆるべきよ  
し申請て、彼法師の發句也。

空にをきて見ん世や幾世秋の月  
詠は 則 御製にて、  
庭にくもらぬたましきの露

これかれあまたさふらいて御一座暮かかるほどになれり。「是迄、春夢草在。」

又、いつの比かとよ、  
春さかぬ花や心のふかみ草  
と云發句せられければ、其よりして牡丹花と異名に云 傳由と云り。

### 當津連歌門弟者

河内屋宗訊 其子宗周 一咄齋  
下田屋宗柳 葦竹齋 等惠 靖齋

或時、宗訊所にて歌の會あるけるに、

瀧邊の時雨と云題にて 肖柏

山姫の瀧の白ぎぬ染か子て けふ初時雨さそひ来ぬらん

金光寺覺阿彌所にて、

枯野風と云題にて 同

音をしる友ともならずやは下荻に ならの枯葉の野邊の朝風

伎藝

意雲 後土御門の時の圍碁の良手也。泉南に居住し、可竹と號し、又皓隱とも云。

紹鷗

當津南 莊舳松町の住人也。茶湯の道執心淺ず。其徳によりて京都田舎茶湯の宗匠として、人々崇敬せり。

弘治元年乙卯十月二十九日、病死す。

此人、武田因幡守仲村と名付。武田信光の裔孫也。祖父仲清、應仁の亂に討死して、父信久孤と成て四方に周流せられて竟に泉南に止住す。

當津や住うかりけん、都へ登、四條戎堂の隣家に身を隠て居住せられければ、大黒庵と名付。戎大黒相并心也。剃髮して紹鷗一閑居士と號す。

初周防國山口大内殿御在京ありければ、時々伺候せり。其耳ならず、其折しも西三條逍遙院殿に因、歌道の望淺ず出入す。年久かりければ、三條殿、其志を感じ思召、古今集を遊され下されける。

其比、五條松原町に宗陳宗悟と云數奇者あり。是は珠光の弟子也。紹鷗、彼所に至、茶道を兩人に尋究疑を晴、年月を送、堺へ皈住て彌數奇に身をなして世の覺ひとかたならず。其後、大内殿へも下ぬ。

春は花に心を盡、雁の歸時と云ば風爐の茶湯を出、又渡聲を聞ば圍爐裡の樂に心をべ、永夜を明す折しも、同所の北向と云所に道陳とて茶湯に身をなす人あり。此人、紹鷗の宿へ夜寒を便に音信

て古今の物語の次でに此歌を口占けり。定家卿歌に、見渡せば花も紅葉もなかりけり 浦の苫やのあきの夕暮

紹鷗自筆に書、數奇屋勝手に押けるとかや。紹鷗の數奇の心は此歌を以て心とせりと申傳り。又、道陳の紹鷗に云しは、數奇には坐禪の心も捨がたきと語合、相友に紫野大林和尚、其比堺に御座

ありし時、佛法を信仰せられける。其後、虚堂南浦和尚の印可の墨跡を求得て、世の重寶とせり。紹鷗、其後時移事去て、甲州武田世の聞おもありしかば、紹鷗武田を改めて武野とぞ號せられける歌

に、 た子まきておなじたけだの末なれど あれてぞ今は野となりける

其子宗瓦と云ける。其子武野安齋幼なりしとき、朝藏主とて澤庵和尚の巾瓶に隨侍せられける。委は載ず。

道陳 附・空海

舳松町の北向と云所の先祖久住の人也。財寶田畠其身に餘しが、歳五十九某歳、正月十八日病死す。

紹鷗死去の後、京田舎の數奇者の宗匠と云名を取り。  
此人數奇の道を執心せられし發は、洛陽東山に慈照院の在ける其御内に能阿彌相阿彌と云二人あり。  
能阿彌の百姓、老て當津に下り剃髮して空海と云り。世人、弘法大師と同名と云ば、世には釋迦院阿彌陀院  
ときへ付に、弘法の名を云は何か苦からんと云り。道陳、此老人の衣食住を心安せり。右の兩人、朝夕  
のあひしらい道具の次第を残す傳たり。是も大林和尚の參徒也。即紹鷗道陳、心を一にして南宗寺  
建立せり。

### 千宗易 道號は利休

南 莊今市 町、千與四郎と云し人也。先祖より久住の人、後に千宗易と改名し、利休居士と云り。  
十七歳の比より茶湯に心を寄、道陳へ通、數奇に名を得たり。  
十九歳の時、道陳、紹鷗の物語の序に、千與四郎と云者、茶湯に心をなして我方へ切切來けるが、  
茶湯見悪ず、雑談も詞艶聞待と、語玉へば、茶を呑候ものをと、紹鷗宣けるとかや。年を経  
て、利休の茶道、道陳の如く天下の數奇の司の用隠なし。其上數奇の心持は、家隆卿歌に、  
花をのみ待らん人に山里の雪間の草の春を見せばや

此歌の消息を以て道とせり。  
又、利休法體の事は、紹鷗を請待せらる其朝、事新ぬるとて法名宗易抛笠齋と云り。利休は道號、後に  
居士號を賜也。其節、古溪和尚の賀頌など之有。其後太閤秀吉へ召出され知行拝領す。然共、本よ  
り閑居せんと思はれけれども、世に出たる事を本意とも思はざりけるにや、慈鎮和尚の歌を口占玉ひけ  
るなり。

けがさじと思ふみのりをともすれば 世わたる橋と成ぞかなしき  
と云歌と聞及侍。其後、讒言の事有て、切腹し終ぬ。辞世共今に當津にあり。

少庵と云は利休の継子也。幼少より利休に隨逐して茶道の上手たり。利休死后、流罪の後に御免。京都  
宗旦の親也。

道庵は利休の實子也。茶道の妙手と云。是も利休死后、流罪の後に御免。今に末流、筑後州にありと云共、  
一生獨身にて養子もせず、近比死して其跡断絶す。

### 連歌師宗椿

牡丹花の門弟にて、逍遙院殿にも知れ侍て、和歌の道に深心を入れて、源氏物語書る事二十部に及  
り。世に類なき事とぞ聞し。煩事にてなく成侍る其際迄彼物語を書けるが、朝顔の巻に至て失にし  
由聞しかば、思續玉へるとて、牡丹花、  
筆にそめ心にかけて契りとや おりしも消しあさがほの露

### 宮尾道三

今春及蓮の家人也。此地に来て上源町に住す。今春家の謡の中より又一流謳出せるに依て、是

を宮尾流とて世に用。

是のみならず千利休の時、茶湯の道を家毎に嗜ける故、此道も專弄けるとかや。然故に息女も見習つて茶具の其々に心を就、物數奇成事多。後に利休の内室と成ば、或時短檠の柱の持所の手懸に燈心を持つる作意は、此内室の好とかや。

### 高三隆達

元は日蓮宗の僧、當津頭本寺の寺内に住す。故有還俗し、高三氏の家にて菓種を商。年を経て小歌の節を一流謳出すより、世俗隆達流とて謳賞翫。

### 鼠摟栗新左衛門

南 莊目口町の内に浄土宗の寺内を借て住居す。刀の鞘師也。細工に名譽を得たり。小口に刀を差入るにそろりと鞘口能合故に、異名にそろりと云ける。後に太閤へ召出され、細工を承に口の能者として細工名人のみならず、鼠摟栗が咄と世俗までも云傳也。

鼠摟栗存命限に及時、秀吉公より上使を下され、何事も望はなきかとの上意あれば、別に望も御座なく候、若は御一門中へ御書にても遣され候はば、片便にては候へ共届申上べきと上聞に達しおはしませと云けるとかや。臨終までも咄は休ざりけり。

咄耳にあらず、詩歌にも携て艶かりしぞ。然ば、関白秀次公の御前に伺候せし時、昔日北山行幸の時、牀に飾せ玉ひし時の土峯石を或人捧奉りしを見侍て、仰に任て詩作曰、千里飛來座間入 今より何 用東 関 在 知ず山 魄 化石 成 土嶺端無拈 出 看 あふみ路はおふじの昔いでどころ うしや小富士の國にのこりて

### 車屋道説

今春大太夫の弟子也。當津に来て車 町中濱に住して、家流の中より一流撰出して聲を吟じ、自筆にして板に彫行。車屋本と世に用は是也。元は七十五番なるを再加増して百番となす。

### 喜多七太夫長能

誕生所は市 町中濱、住居は北 莊櫻 町也。小名は八之丞、親父は醫者也。願慶と號す。舎兄を萬丞と云り。秀頼公より召遣れて、大坂陣に討死にす。二男は醫師の家を續、陽春と號す。

七大夫、七歳の時より當津勘太夫と云能大夫の弟子也。其時より踏舞の妙を得たりとや。故 後は天下無雙の大夫として今に至て、子孫其藝を道に達し、公方の御用を承り奉る。

### 惠藤源左衛門

北 莊矢藏下町の住人也。中村備中入道一噌の笛の弟子にして、其妙を得たりと云り。

所持の瓦落と云笛は、當津常樂寺の僧成就坊の什物管弦の笛にて有しを、惠藤所望し、一噌の指圖を受、京指田に直させて亂舞の笛に用と也。其後、常樂寺にて能ありしに、此笛を吹ければ金堂の軒に響、瓦落ける故、笛の徳世に聞、近衛殿より記を遊され、瓦落と名付玉ふ。名管也。此笛を弟子藤田清兵衛が手に渡す。其後、尾張大納言義直卿、扶持人と成由也。

### 堺舜慶

世間に堺舜慶とて茶入を持、弄事は、此人根本當地の生にて、其後尾州瀬戸にて茶入を焼。又、伊勢にても焼故に、其々の所の名によりて分あれども、根本此地より出たれば一つ事也。其子孫、利休時代迄堺に居住すと也。

### 一節道清

鼓の胴築也。名字を云付て一節の胴と云也。此作の胴は木地を用る事也。塗胴は鳴劣り。先祖より今三代にして築。

### 甫竹

茶杓細工の名人也。本は利休より傳授すと云り。其後、古田織部殿の引廻を蒙り世に知らるる者也。或時、台徳院殿へ召出され、茶杓を削、數度捧奉者也。今に子孫甫竹某とて之有。

### 土佐久翌

天正年中の比、最繪を書。其子を源左衛門と云。舎弟左兵衛將監光起は、寛永年中に京都に移住す。

### 表具師西順

生國は奈良の笠置の住人、中氏、古来表具の名人成故、千利休當津へ呼て、其比表具専用。即生國を家名として代々奈良屋と號す。西順より其子孫、慶勝、慶音、慶庵、慶巖。

### 雜賀淨甫

唐木細工の名人也。生國は紀州雜賀の住人、豊後守と云。傳紀州浪人、當津に来て細工の譽を残せり。即彫印に名を記す。

### 加賀四郎

慶長年中の刀鍛冶也。二代にして滅す。銘に加賀四郎とうつなり。

### 碁利玄

日蓮宗の僧にして、碁の上手也。  
南 莊湊村の海濱に庵を構て住す。寛永年中に専碁の術を以て天下に流布す。

### 中将碁温故

北 莊妙國寺の寺内法林坊の住侶、日蓮宗の門徒にして、中将碁の良手也。  
或時、法皇の御所へ召出され、法橋宗知と中将碁をささしめ兩人の勝負を觀覽ありけるに、恩故兩度勝利を得たり。茲 因、天下の名人と聞を取り。

### 松井與次郎

後醍醐天皇の御時、典藥頭和氣丹波兩流の醫術の内に武藝をも嗜家也。  
或時、天皇御惱の時、陰陽を占ければ、是恠鳥の惱所為也とて勘奏するに依て、即此時兩家の者共仰付られければ、和氣與次郎を撰出され、恠鳥を忽射落ければ、即時に御惱愈。其恠鳥の落所は井の邊也。松篠有しに、帝より勅を承て即和氣と云名字を改玉ひ、松井と號せり。代代松井の庶子、俗名與次郎と呼来り。其後、當津に住居して今に至て與次郎法體して、醫師松井宗閻と號す。家の紋は篠也。前宗閻は古今傳授也。

### 名物

古来より此地に茶湯の會を持弄に就て、古人天下の名物を貯る旁々多。記録せる舊巻を求出頭者也。然共、世遠時移て、此記録の中の人の子孫、今に存も有。又は何方の誰人也と知者もなし。故に此道具も亦此地に留も有。誠に世は常ならぬものとぞ。

元龜元年四月朔日、信長公、美濃國岐阜より御上洛有て、堺に求、蓄たる名物の道具共御覽有べしとて、松井友閑法印と丹羽五郎左衛門尉長秀に仰付させられ、兩人承て堺の南北に觸しかば、所持の者共、此度奉ではとて持參程に、幾等ともなく集、信長公一々御覽有て、勝たるを留しかば、

天王寺屋宗及 菓子繪

藥師院 小松嶋

油屋常祐 柑子口

即應じたる貨より遙に過分にくだされければ、三人の者共、頓に徳付たるやうにぞ見へたり。

又、元龜以前、永祿八年乙丑、信長公へ進獻せし道具には、

今井宗久 松嶋葉茶壺

紹鷗 菓子繪也。

天正十三年乙酉十一月朔日、北野松原に於て、秀吉公御茶湯の時、當津より召出され茶具持參られて飾

奉しは、先秀吉公の御道具を一番として此茶具爰に記及ず、

二番 千利休 三千石下さる

烏丸香爐

雁繪

捨子

檜柴

尻膨

攻紐釜

銅

塗天目

高麗茶碗

入道蜘蛛釜 竹蓋置 折撓茶杓 蛸壺水翻

三番 天王寺屋宗及 三千石下さる

枯木 撫子 初花 尼子天目 高麗茶碗 折撓茶杓 入道蜘蛛釜 竹蓋置

四番 納屋宗久 三千石下さる

月繪 松花 祖母口釜 信貴肩衝 頭巾茶碗 竹蓋置 三嶋茶碗 折撓茶杓

此時、秀吉公、御手前にて御茶下さる。衆中は、

一番に

近衛信輔公 日野輝資卿 家康卿 信雄卿 津の侍從信兼

二番

秀長卿 秀次卿 利家 氏卿 貞通 利休

三番

有樂 秀勝 頼隆 秀家 忠興

### 古来當津所持名物茶道の事

#### 笠原宗念

肩衝 何の肩衝ともなし。摠じて何ともなきは、其主の家名を名とするにや。

#### 萬代屋道安

投頭巾 或人、此茶入を珠光方へ見せければ、折節頭巾を著して見られけるに、褒美のあまりに頭巾を投玉ふ。故に其より投頭巾とは名付たり。此壺に箆目四あり。摠薬濃飴色也。向に一つ下に一文字に押込箆目あり。其内、流色薬あり。本は珠光の所持。

九重壺 此壺、白柿壺也。けふこのへに匂する哉と云歌にて名付たり。七斤餘入也。

珠光茶碗 竹田茶碗 筒 竹茶碗 前には守徳所持。 灰被

#### 茜屋吉松

木野邊肩衝 弦付茶入 牧溪鶏繪 断江茶碗

寅申壺 寅申と云事、天王寺より出壺也。天王寺の市の日、寅申の日に立市に出たるに因て名付たり。六斤八つ

入也。前には木屋宗勸所持。

#### 小西道純

駒蹄茶入 肩衝 内赤盆

#### 鹽屋宗悦

末松山石 上下二寸八分、横五寸三分、前後二寸九分許。高山あり。黒白上に交。末の松山浪こさじと讀し古歌を取て名付。

象瀉 葉茶壺也。此壺に瘦十五あり。松嶋に等と云て、奥州の名所に象瀉と云所有に因て名付たり。歌に松嶋や小嶋の海土の詠より猶まさりゆく象瀉の月。

灰被天目 水仙花繪 醋色合子  
小野肩衝 前には尼 崎屋道易所持 肩衝 前には尼 崎屋宗向所持

油屋常祐

細川晴元天目 臺 七之内也。 浅茅竹茶杓 芙蓉繪 舜舉筆也。赤色の絹に書。  
臺 數の内也。 餌簀水指

小嶋屋道察

客来一味 唐繪の名筆也と云傳。 枯木 時雨壺 藤瘦五徳 前は日比屋了慶所持。  
船前は宗祐所持。 臺 七之内也。 前は革屋長善所持。

赤粉屋宗陽

肩衝 新田に似て襦あり。面白 藥あり。 虚堂文字

茜屋宗佐

趙昌花繪 鶴頸茶入 駒蹄茶入 前は赤粉屋帶刀所持。 柿茶入 前は小嶋屋宗活所持。

淡路屋宗和

夕陽繪 太鼓茶入 餌簀茶入 赤松則祐肩衝

今井宗久

浪繪 臺 數の内也。 紹鷗天目 虚堂文字 鍋釜 前は珠光所持。

志野茶碗 志野宗波、風流名匠にて所持せし茶碗也。但唐茶碗の由申傳。 芋頭茶指 前は紹鷗所持。 開山五徳 林哲釜 守徳竹茶杓

今井宗春

虫繪 飯銅 内赤盆

網干屋道琳

浅見天目 拝領 馮海粟繪

伊勢屋道滴

瘦馬繪 小軸李忠

圓座肩衝

唐茶碗

肩衝

太子屋宗宇

牧溪大根繪

臺數の内

小嶋屋

肩衝

粒子花瓶

薬師院

肩衝

飯銅

子昂硯

葉室文琳

天目

石橋良叱

串指雀繪

釣瓶

坂東屋筒

前は蜂屋道於所持

蝸牛花生

松江隆仙

砧花生

觀物初墨跡

瘦馬繪

李安忠筆也

前は伊勢屋道滴所持

天王寺屋宗及

江月和尚の父也

文琳茶入

天目

臺數の内

黒臺也

覆輪鍬鉦朱にて梅内輪より中朱にて一文字有

船子繪

筆は牧溪。讚は虚堂也

不破香爐

前は鳥丸殿所持

鏝無花生

布袋香合

鷺丸繪

梁措筆

宮王釜

志野茶碗

水指

合子

鏝口柄杓立

了無 但本書に家名なし

貨狄船

前は本邊所持

黄天目

石津屋宗嬰

雀繪

深山茶壺

錢屋宗納

無準文字

虚堂文字

須彌釜

筆筒

宗本 本書に家名なし。

貝盡繪 玉礪夕照繪 八幅の内也。前は浄安所持。

重宗甫

飯銅 虚堂文字 千種茶入壺 内赤盆 圓悟文字

武野宗瓦

小茄子 漁父硯 象牙茶杓

正通 「本書に家名なし。」

牧溪摩腹布袋 翁天目 稻繪 月山筆。前は練屋宗和所持。

蒲公英繪 拝領。

千宗易 「利休事」

情張釜 鶴一聲花生 香爐 前は三好宗三所持。 三好實休肩衝

右の内、家名舊卷無故、是に記す。

土産

一休和尚鳥繪扇子

和尚、住吉林菜庵居住の時、當津甲斐町中濱扇子屋甚右衛門と云者の所へ折々來臨し玉ひて、家内窶しきを憐玉ひ、白地扇子に烏或銀臺繪などを書玉へば、世人此扇子を賞翫すと云り。俗語に扇子屋へ入聲し玉ふと云は僻言也。

湊壺塩

今の壺鹽屋、先祖は昔年は藤太郎とて猿丸大夫の末孫と云り。花洛上嶋島枝村の人也しに、天文年中に當津湊村に來住居してより以來紀州雜賀鹽を求、土壺に入て焼反諸國へ商賣して、壺鹽屋藤太郎と號し、世に廣用。故に今に至迄其子孫相續す。

承應三年甲午に、女院御所より天下第一の美號苦すとあり、時の奉行石河氏、是を承り頂戴す。又、延寶七年の比には、鷹司殿より折紙狀あり。呼名伊織と號す。

湊紙

昔年、川端道仙と云者、洛陽二條堀川の住人也しに、後醍醐天皇御宇、宿紙を漉、所の名に寄て湊紙と云習せり。

鐵炮

古老物語に云、本朝に鐵炮傳し事、上代には是なし。

中比、文永二年乙丑八月に、大元老皇帝日本を攻んとて、兵船六萬余艘に軍勢を乗て博多津に推寄。日本にも出向て防戰に、寄手の方より鐵炮とて鞠の勢成鐵丸逆事板を下す車輪の如、霹靂する事閃々たる電光の如成を、一度に二三千投出たるに、日本の兵多焼亡され、船櫓に熾付て消べき隙もなかりと、太平記に書侍。日本には此時分鐵炮と云物知たりけるにや。

正く日本に傳しは、永正七年庚午、和泉堺より、小田原の山伏玉龍坊と云客僧、買求て北條氏綱に奉。其後、氏康の世に成て、和泉堺より國康と云鐵炮鍛冶を呼下して數多張られしに、根來法師に枚坊二玉坊など云者、関東を廻て鐵炮を教弘たり。

又、甲州家には、大永六年丙戌、西國の浪人井上新左衛門と云者、信虎に奉公して鐵炮を教けると也。未、慥すとあり。

又、天文八年己亥八月廿五日、薩州太守嶋津修理大夫義久、領地赤尾木湊へ南蛮の大舶大明國の俗儒五峰乘來。船中に蛮賣の長牟良叔舎と云者、始て鐵炮の秘術を義久の家臣種子嶋兵部丞時堯、是を傳授す。當津住人橋屋又三郎、是を鍛鍊して普諸國に流布す。是、鐵炮の濫觴也。「已上、古老物語」。

又、大筒の張初は、當津芝辻氏也。此氏の先祖より鍛冶の家にして、北莊櫻町に住す。中比、清右衛門入道妙西は、鐵炮張事、其妙を得たり。其子孫理右衛門入道道逸に至て、彌精微の處を極た

り。其比、異國より銅の鑄筒玉目一貫目許の大筒渡しに、東照宮、鐵炮の大筒得玉はん事を思召、諸國の鍛冶を召集、鐵炮張の大筒を調進上仕との上意成下と云共、誰か御受を申上者なかりしに、道逸畏て領掌し奉る。即、本口一尺三寸、末口一尺一寸、長一丈、玉目一貫五百目の大筒を不日に張上奉る。是、蓋鐵張の大筒の始成べし。其大筒、今紀州の御城に之有由申傳。今に至りて、其子孫門葉相續して、忝も公方の御用を承列に加る家と成り。

### 土居原鋸

昔日、櫻町の西には人の家居もなく土居也し所に小家を建住居して、鋸を打出せり。他人の工よりも勝たる故に、世人持弄て土居原鋸とて重寶す。今に至迄、其子孫絶ず。

其土居原に町屋を建て役地と成り、此所、櫻町の續成故か、梅小路と町の名に云り。

### 出齒庖丁 附・御方庖丁

魚肉を料理する庖丁、他國に勝て當津より擣出を吉とす。其鍛冶、出齒の口本成故、人呼で出齒庖丁と云り。今に至迄、子孫絶ず。

又、萁若庖丁鍛冶の名人有しに、吾妻に相槌を擣るにや、是又人名付て御方庖丁と云習せり。今に子孫絶ず。

### 甲 鉢鍛冶

鉢鍛冶宗鐵と云は、昔は甲鉢の上手也しに、千利休の比より數奇屋金物細工の名人となれり。

### 白粉

諸國に白粉、此を焼家多と云共、當境の小西白粉は古来より其名を得たり。異國の六官と云者、彌其制法を傳てより精好也とかや。

延寶四年丙辰六月廿八日、中御門大納言、宣旨承て和泉目の官を玉はり、宣案を頂戴す。

### 天神前櫛

此櫛の名を得る事は、鋸を左右へ引事を得たる故に髮筋刻ずと云り。

### 塗木履 附・雪踏

女の著る履也。諸國に多と云共、當津今市町の木履吉とする故は、舊成迄齒の拔事なし。譬石原を行共、轉事なし。

雪駄の始は、昔日尻切と云物を用。千利休作意として、雪の比茶湯の時露地入の為に草履の裡に牛革を付させ用る也。即、雪を踏と云義を取て名付たりと云傳也。

白炭 しろすみ

茶湯の爐中の色炭也。光瀧の炭を取寄て白塗て用ゆ。

舳松瓜 へまつうり

南庄舳松村田地より作出る甜瓜也。古昔、東照宮へ献上し奉りし例に因て、今に至迄毎年其時節を得て公方へ撃奉者也。

鬼煎餅 おにせんべい

海會寺前鬼煎餅と云事は、或人の仰られしは、伊勢物語に鬼一口と云縁を取て小を云と也しに、近年は鬼と云は散氣無物と心得て、殊に大に拵て鬼と云名に合すると見へて焼誤り。

詩人は煎餅を仙袂と書り。

紅葉豆腐 もみぢどうふ

何國にも豆腐は有共、別して當津の勝たりと古人より云傳り。紅葉と云名を加たることは、堺の櫻鯛にも劣ず味なればとて角云とぞ。花に對する紅葉の縁成べし。又、或人の云く、此豆腐を人の能かふやうにと祝て付たる名共云り。買様と紅葉と音便成故歟。今豆腐の上に紅葉を印す。詞に就て形を顯成べし。買用も通てよし。

前魚 まへのうを

住吉明神の社の御前の海邊より寄來魚を、前魚と云。又、一説には、西宮戎の御前の海邊より寄來を云共申傳り。時節は三月より六月までの事也と云習り。

歌枕 為家卿歌に、

ゆく春の堺の浦のさくら鯛 あかぬかたみにけふや引らん  
と讀たれば、鯛許に限様なれ共、摠じて當浦の魚を前魚と云習せり。

撰糸絹 せんじきぬ

往古此浦へ唐舩の入り時織人を乗來を、此地に留て始て絹を織出せしとかや。其子孫傳ずと云共、其工今に至て精好也。

金紗 きんしや

元和年中の比、唐人當津に渡りて錢屋松屋と云兩人の者に金紗の織様を相傳してより、其の兩家相續て織出せり。茲因、今代に及で、世間に散在せる物を名付て、錢屋裁、松屋裁と持弄者也。

貞享元甲子年二月吉辰

二條通松屋町

竹村市兵衛

板行